

清暇錄

四

大正十年四月中浣起筆

特別

14

1919

335



清暇録

大正十年四月十七日



の四月十曾次出方が因新協会の大令より
 良む出張の心懸くそ其の進歩中凡ゆる
 の氣分又カカん取りたるを終る大令の
 (き因る針りつれんして西洋書院の執事
 没頼しとう此の著書と構ふ協会の珍存
 續々命入擬し方一篇の好日のあつた
 九を言及一政体の方政めいんを直る成る
 得の意いべししを打集するも其は横山
 うよ及心ずしとるく同じ書と集るその
 を心ると叔二十数年元を考き敬

号(四月十日)坊可得る所回を左の如し

一刀萬象 三 欠本

唯中印譜 二 三十四

池部道雪一刀萬象の目録古印譜中無るものあり
舟部段亦崎陽白氏の家刻に傳ふこと又欠を得
たるものあり、其刻の印様ももを所をこんと
辨へたりし、か今も辨へん多し一刀萬象一を
欠れりるも遺域也外に冷決齋印譜四冊を
咸豊の人の刻する不上乗の刻と云ふ可くも
六印字本方に欠するものあり

弘法大師三本

十吟詩

十七意法

遺書

右三帖文化十三年^{年乃至十三}漢易の跋あり

稀なりある所のもの也和法帖大観のゆゑ
ハミヤ也 八冊之也

徳文回書

初掲本物あり今の稀也且價高し
此を七冊あり初掲本を有るも一冊欠他
日補見ことを期す 廿四冊

追記一刀萬象上巻目録部註法家の序を載す林家
徳珠玄代山支那人があり、千文丈二冊あり完統あり、欠
本と私印をぬり部則下巻あり

小波氏お伽 三十年記念會 發起人總會議事報告

總會當日(四月五日)は淺田委員長病氣缺席のため、長谷川天溪氏その代理として座長席に就き、本會の準備經過を報告したる上、進んで協議事項説明の勞を執られたり。

席上、議決したる事項左の如し。

- 一、柳原伯爵を本會々長に推薦すること。(總會後、同伯爵に依頼して、御承諾を得たり。)
- 一、従來の準備委員を實行委員と改稱し、そのまゝ事務を繼承すること。
- 一、記念出版『お伽の日本』(博文館發行)、お伽祭(六月四日、五日、帝國劇場にて開催)、お伽噺大會(六月十二日、帝國劇場にて開催)、記念祝賀會(六月六日、紅葉館にて開催)の四項は、その準備實行に關する一切のことを實行委員に委託すること。
- 一、小波氏に贈呈すべき記念品の選定は、實行委員に一任すること。

實行委員會にての原案は、小波氏の立像木彫(身長約三分の一大)をつくり、これに記念出版特製本『お伽の日本』を添ふること。木彫製作に要する費用は約壹千圓の豫定。

- 一、記念事業は嘗て委員會にて案出せし桃太郎像を東京市内適當の場所(豫定地は日比谷公園)に建設することを第一案として、その實行方法を講ずること。これに要する經費は約壹萬三千圓乃至三萬圓。
- 一、記念事業を除きて、その他の本會事業に要する經費は、發起人及び贊助員の間より任意の寄附を受けてこれに充つること。もし剩餘金のある場合には、これを記念事業の基金とすること。
- 一、發起人及び贊助員以外のものにて、寄附金の申し出ありたる時は、これを受くること。
- 一、記念事業に要する經費の調達につきましては、更に協議を重ねて適當なる方法を講ずること。

以上

唐井一の金と田代を金とを番用をの教の田代に
着ることに内決し、加藤子爵より二千円出金を派し
物類は千円の内四ヶ月と余格を番集するもの
とあるなり。

四月廿九日記

○早大の決きのま長をめぐらさるやの同起と喫緊
の案件をて時軍の番高田中にて内決を徹しし
後ハ、~~○~~ 案ありお作を有ることを教回し及べり、ま
を塩沢場士を有ることを昭告するものも七人
経量能力を缺くる所あるものも田中~~権~~権に
し、早大物接の衝にありたる四五の校友私約
あり、決きのま長と田中を有るべしと早大を以て
一が現るるを罷めんとし、田中とつらきもの、田

中をいふ今よりと経量の向はありしもの、昇格
以後の難局をありしものありしもの、田中の切の
ありしものありしもの、依りて塩澤と内交渉を遂げ
田中の譲らしめんと擬し、田中唯多子馬次を
塩澤に色・親の友人おり、塩澤に説く所あり
し、塩澤内容も、流をが、一方田中も塩澤と塩
澤の流をきき、事を知り、とつて、或とる校のま
ら、~~○~~ 親を抛るともあつたり、校の仕末を
私約あり、校友維持をきき、為のま、五体と久い、窮
する、ことあり、全体田中、経量の伎倆あり、ま
校の部より、成を抛く、ものあり、現る、中にも又
快く、ま、田中の面を、の、ま、殊、大、行、者、の、

如きも田中を排することありく。田中を推すより
多し。困難の多しゆあるを、塩津を推すといふんが
そ枝の元を過海のものあり。何れも容易あり
との困難に接しし。塩津に於て飽まか
自に起つる意ある以上、之れを丹割抑へたるま
終に止むる。塩津を推すこの内、淡く梅り
ハ、前より前永樂後永樂に於ける今会の時
も、田中の和約をせざる。校友の以る梅り
七席ありしが、田中の和し氣のまゝを推すん
何れも推すを辭し謝するのありしと云ひ
あり。人々の真に而倒のもの也。塩津を推す
天中を推すに比し、一ありし。而して之れと

抑制するは、校を更ふる前田の如き校給を悉き
起さん。校の可なり。誠、困つたもの。何れ
や印名心と斯く支配を考へるもの。を、
○本の坊

寒山詩素蹟 三冊

を得文化十二年刊。古俗傳大鼎。慧然の注す
る所也。北下梅期。價甚し。余前月真
山子詩集。解二冊を贈ふ。竟又二年。種
交易注する所也。余初、素蹟と名し。或
其解を註記するもの。あやと難
折く。新物より。二本の注
一異也。甚だしく。前と解あること

切らざるものなり、若く解たまると七巻を引例し
て説き印つて佛を多く引く類、素願を乞ふ
て佛を引用し注も亦甚だ細節に渉る、寧ろ
山崎孫寛の二巻に缺く可ら類、素願の價
の貴きものなり、七巻の類、素願の價、四月
史記す

○史の古きもの北條宗規社の園たりし出来し類の
流し下巻海部塩師の終木氏、馬野の巻、
多し類し、そのとて多し、傷物を乞ふし、
リ京山の巻、筒の巻、二冊を借り多し、
を記せば、東の巻、郵送すべしと云ふ、余り、
牧之巻の北條宗規を著し、家元也、
十二

京山の代、そのこと世に出ても、
牧之巻に花する馬野の巻、筒の巻、
けん、お教、号に渉る、
こと、京山の巻、筒の巻、
死を、
別道し、
り、
牧之、
し、
る、

あり文政五年平安河川畑秀度澤又の跋あり山瑞
光寺花助より元政自志の聖書と傳ふ我ら日本法
帖大観の内、收めて可也

大政廉因、信又、了了、高僧都道行碑記一帖
七列在す、これより高島の本を刻したるもの、
家
花、直振の一面碑あり、此の帖古搨るゑも錯
簡あり、年號、亦、高島の高字外印二
款瀾如、直搨を以て補ふの必要あり、
口の本法帖大観中のよきを
傳へ

高野外和面款便詳尺 一冊

安政年間お四と、條約と傳統せる結果として

外字をよぶ必要を生じ、
外文と和四して、
あり極めて細釋のものあるも、
又字卷、
二、
五月五日記

○於木敷之宛山東京山の者、
ありつづく記、
閱覽して、
る

文政十二年十月廿五出就の副巻のあり
心取扱上、

く見せしめらるるべき事ありしを
しし中のあつたことありしを
函根山根の園におちりて
入るる園も及らず其書も
ことありし

東山の世の肉西馬路を以て
るるよし、此方簡中の
を第一とすることありし
ハ此の世をがし年七略
の方面の副政として馬路
こと書出の間にあつた
御を詳に記し

比由秋の後のまむし
の二つあり

雪落行のまむし
秋のまむしを採りし
し本のまむしのついで
目ありしついで
のまむしを採りし
まむしのまむしを採りし
まむしのまむしを採りし
まむしのまむしを採りし

又其後のまむしを採りし

まじしこころは松を草をまらぬ心あはれまじしこと
あつちまじし熟讀いやく北風の雪をとく
とあつちまじしことまじし草をまらぬ心あはれまじしこと
其故のまじし火災を備へしことと思ひまらし
牧之の雪のまじし雪中の用具を見まらしこと
多傷をまらしまじしこと(圓)まじし花の二階よ
りまじしことまじしことを認む

括弧はるる土を建給し、まじし土を納置に
施具の薪のまじし見世二階へ納置し、まじし火
災のまじしをまじし土をまじしあつちまじし
まじし平洋のまじしをまじし納置し、まじし
風をまじし土をまじしまじしまじしまじし

リひくまじし前年考へるまじし御記のまじし
まじし二季雪詠し、括弧の縁あ、并紙の
まじし一枚、詠詠、まじし雪車、まじし
かぢまじしの類の詠詠、まじし大女のまじし
おまじしつら二つ階をいやく、まじしまじし
まじしまじしまじしと、まじしまじしまじし
まじしまじしまじし泥守りまじしまじし
まじしまじしまじしまじしまじしまじし
十年の考へるまじしまじしまじし
まじしまじしまじしまじしまじしまじし
まじしまじしまじしまじしまじしまじし
まじしまじしまじしまじしまじしまじし

公人抱じ北を、紙の魚池部、お姑々谷、
津守方、姓市二、中二、男支、給、有、年二十、丈、お
舞、し、る、美、の、者、う、と、此、を、紙、に、有、る、の、雪、の
園、を、不、也、こ、ゆ、さ、わ、ら、む、あ、ら、う、こ、ん、り、わ、ら、う、こ、と
う、け、後、け、う、お、年、の、舞、終、を、見、せ、雪、車、の、つ
ふ、方、雪、中、の、と、こ、ら、も、其、の、雪、の、と、り、き、い、り
と、一、文、不、通、の、者、あ、ら、う、と、あ、ら、う、也、錯、施
い、り、一、圓、の、を、ち、り、と、よ、う、め、き、し、一、圓、お、こ、と、と
の、お、札、ま、い、り、け、い、こ、い、ま、い、ち、も、ま、く、と、と、う、が、一
笑、を、催、し、し、て、え、ら、う、目、前、の、と、り、と、を、其、人、の
や、ま、き、い、ゆ、る、也、紙、の、の、も、も、ま、く、く、り、と、り、
一、曲、亭、ら、う、も、音、作、あ、ら、う、と、雪、紙、の、子、初、く、曲、亭

う、た、の、お、ご、う、の、う、上、首、尾、あ、ら、う、紙
え、り、と、曲、亭、ら、の、文、海、あ、ら、う、を、難、と、運、び、し、
と、思、ふ、べ、し、
(丑月、お、り、記)
○散、之、う、く、馬、路、と、東、山、の、川、橋、の、疎、き、を、雪、場
成、印、の、あ、ら、う、と、氣、者、ひ、と、り、緯、文、の、お、ら、う、こ、と
を、京、山、の、勤、め、の、ら、う、と、
馬、お、く、と、あ、ら、う、と、私、紙、紙、あ、ら、う、紙、を、
ち、ら、う、や、う、と、い、ひ、こ、い、ま、い、ち、も、ま、く、と、と、う、が、一
如、く、と、あ、ら、う、と、音、作、あ、ら、う、と、雪、紙、の、子、初、く、曲、亭
七、印、を、あ、ら、う、と、お、ら、う、と、始、め、を、あ、ら、う、と、甚、だ
お、ら、う、と、人、腰、と、ぬ、け、を、あ、ら、う、と、右、の、お、ら、う、と、自、
ら、う、と、札、を、あ、ら、う、と、紙、料、を、あ、ら、う、と、

眼病といはれし氣の毒なるものなりといづ
れ若き人の位に也。此の如きことあるは

眼病の如きものありし跡をの問物也。此の如きこと天
保六年と覺しと正月廿四日付の古簡やりのなる
天保六年九月九日附の書状なり

私物といひしと雪志初ッ面す春三月迄の上様

の成見しと評おしと多しと云々後ッ面七と

いふゆゑに之を九月京におを具しと云々

鞋をとき後ッ面のゆかほいといふ一京の真景

をうりしと云々もあましくかくあんに上ッの首

尾也

表題の如き事あるは一もおほいといふ一おれ

字より志の字の方可愛きと評し、由是

十日の祝ふおと後、此書の北紙雪志三卷

此書の書物文漢書様 此書の日向半切一枚

すはなるなり、もの江戸中を尾くくむり

是故に其の書とむらびらと云々、書り出

しと云々もあましくおを十枚か云々やいんさ

し上ッ

書物と云々もあましくおを推すべし

同し書状の書は收之を治の日のことなり、左の如

認めあり

さまの長きものを今も志の癖也といふ

今もあましく家のゆかほもあましく未年尊銘

得て世々行つたるあう名を他國へ雷國せん
る我ら於て者雖もあつたあう年十一年の印
望一時の成就せんる良縁の時と得たる
ちり可賀し

一昨の如明出地文漢名の者既嘉七としあ訪
ひたり雷上の卷華の併の校合持参りて
之入口上の雷巻の外題おぼゆるべきるる
雷語とし成らり右を唱くてもし且六
をさししるるあう名を志し居せくも此
が雷語としあうりてやせんう里い
うへてもあし申うるるあう名を
雷語とししとて或又馬琴今嘉七の末

のち此名見し由も他國を居たり雪語
の方語よりしるるあう名を先生思はれ
雪語といひしりるるあう名を先生思はれ
しあう名新言下の名を雪も志しあう名
ハ遠くあう名を志しあう名馬琴といひ
あう名因しきあう名を志しあう名を
あう名を志しあう名を志しあう名を
の二葉し語とすししとあう名を志し
左按し思はれあう名を志しあう名を
あう名を志しあう名を志しあう名を
あう名を志しあう名を志しあう名を
あう名を志しあう名を志しあう名を
あう名を志しあう名を志しあう名を

るも此のいふ人とは存且つ其の心も同くまを向
見してや備へしとは是れ馬術の秘書前と見
んとせよか若しとてこゝにまを向

と有りて馬術の秘書前と云ふ山に雷鳴捲くも
す修りを物細く行へし一覽火中記と志を
しとる副歌をとゆり添くやう馬術を免し
秘書を南山先が辨別すも其の妙事と云ふが
いんを物之とていざと辨別を行へしと
見ゆ秘書をたの上と物之とて日
戸の南山の内の内をたきえりし時方を
一覽するこゝに云ふが秘書使法とありしと云ふ
ら

抑も馬術の秘書前と云ふ秘書前と云ふ秘書前
山の千々種と云ふは流石と云ふ平のり
さうしと云ふは馬術の向と出物と云ふ
子尾く種と云ふは流石と云ふ平のり
のいふ南山の力のちと云ふのいふのいふ
心切こゝしと云ふは秘書前と云ふ馬術
秘書前と云ふは秘書前と云ふ南山
り一々其の秘書を扶中と云ふ秘書前と云ふ
一覽火中記の方向と云ふは秘書前と云ふ
を記す

秘書前と云ふは秘書前と云ふ
馬の秘書前と云ふは秘書前

のせうゆえをさへよるこむす馬をんハ

ひきいん人張けるるもあつと

亦二帝を馬習う折角雪濤を引受けりるる年
を証を約を履まするるをさう

美の次の出状(天保六年十月廿五)又北城漫遊
のうを載す

未夏私(即)印の印光福の事りていふ
下ありて私七回を帳を継承す心掛
々也の北馬の傳説運中右の御取
のよりハおれく北馬よりもさきく北馬尊
翁の御深切今又忘ぬといふ人の信を
不消の北馬の酒をもとふ人おわるるを

運中も故梅く登り、子廣とるる北馬
かひうじし私を二十年の事とめ故梅く
こととをせが又にましく申入る故梅く
連ういふあひも聞入ることをせが賢
人顔しるをもぬきとあがす野るを
うり、あつと東山つり、あつとをいひしや
ど、其故を尋る人もあつと聞中の信を
いふの病信をいふものも良一言を稱す
り、又二度きりりて再び其故をたつと
九代おまの信格をいふやつといふと
七口場く空ち故のいふと、か
九年而望の信をひらきと江都の信

後之命を出すまむの成ゆをえんことをこれら也。京
山のありき書をいへるる京のありき。物之の書。行を
書き改めおろし。此の子を。初め。國を
日全部出せしむる。國を。安んじ。此を。知る
執事。進ませ。終る。京のありき。こと。さう。書。漢
と京山の家庭。の。は。う。京山の。側。京の父
の。命。ま。し。画。を。終。し。う。便。利。の。さ。う
し。る。ん。六。七。年。の。苦。心。ど。ん。あ。の。報。謝。を。い。え
る。や。と。云。ふ。は。ま。こ。と。な。は。れ。る。事。也。あ。の。心。氣。の
境。遇。も。其。つ。こ。悔。ん。事。也。

京山を牧之と同甲として四十年の交を恰る親
族の扱りに各るの玉枕を兄子の文作まこと

日擲すへきことあり。此の端より。必し。双方
家。上。の。み。ま。む。曲。重。す。と。例。と。し。京。山。を
常。々。六。の。娘。の。長。女。候。は。召。さん。と。事。
に。其。の。あ。い。を。う。り。す。と。例。と。し。但。し。ち。や。り。も
此。の。娘。の。候。の。日。祝。も。お。し。な。し。と。事。を。い。は。さん。と
牧。之。の。お。尚。集。の。巻。首。に。席。し。は。る。あ。の。其。の
子。を。え。り。一。年。故。が。の。元。節。は。持。し。牧。之。を
吉。岡。を。あ。や。さ。る。席。の。自。物。志。の。真。晒。し。カ。タ。リ。の
味。増。漬。或。は。塩。り。と。事。を。い。は。り。世。を。例。と。し
其。の。真。晒。し。の。娘。を。嫁。に。大。名。の。味。所。と。事
と。事。を。い。は。し。と。事。を。い。は。り。其。の。次。聽。と。事。と
謝。状。と。い。は。り。京。山。を。下。り。と。事。と。い。は。り。此。の

余う一世の志願を此紙雪話と著して善く
海内を流布せんとすまは初め雪話
と説とも市井の口實を余の如く一巻と著
いさんことを拙し市傳七説し後々玉山其
著るの志とすう志願行ふのすむるの
馬路の事と交ひること深けんが之れを拙す
ること、まう、あつて紙後、雪話の事
を撰ひ玄田故言の揚示の事をして
机上の耕世説とす後々、星の事をして
福馬の事とすやうの事をして四つ紙し居る
此即覚束とす信つて之れを説く、更らるる

山ありて世を所いといはれり引論、割と人
余の著る(先義)とて聊々の謝をうて引
論、刑後、前とて江戸の語、あま、近年
の著る(東山)の、小結の地位を止むる
列り、とて信く、東山の、先計ひ、信る
こと也馬路、後悔し、東山を、訓、信
し、善い、とて、紙、し、先、い、余、を、東山、を、忍、耐
を、説、き、あ、む、く、馬路、を、訪、ひ、し、あ、り、う、東山
七、兄、以、末、の、齋、文、と、こ、ろ、ん、う、近、路、と、書、と、せ
す、こ、と、一、天、保、七、中、五、月、廿、日、後、う、机、上、の、耕
を、磨、か、し、あ、り、う、東山、を、信、ひ、居、る、事、を、う、積、心
の、説、話、の、日、の、信、る、を、あ、り、う、水、無、月、の、信、る、

ついで自分の中をなして三週りの入浴をなさる
たえ事との御名を牧山に托し、余の病
と其後漸く重く、常山清方六十日、乃心
常山長光寺を廻り、御府せり、定まらぬ世の
別れと常山の御名を病中、つらねて、御
葬の物あるさ、一冊、二冊、三冊、全綴し
永く記念とす、又、見ゆ、又、たう、之れを及
所とす、莫ん

常山今と同齡、さう、白髪、さう、眼の
ついで上下の白歯、難、う、也、さ、又、序、に
いふ、常山娘、あ、人の、い、百人、躍、上、年、を、長、女、
萩の城、を、杉、平、大、膳、太、夫、持、つ、い、つ、い、ん、と、文

い、常、山、満、悦、の、上、あ、の、昔、の、在、ら、る、若、上
と、初、其土の端、仰、せ、り、山、東、若、を、購、し、と
若、の、娘、身、一、休、付、う、大、主、の、力、あ、及、と、し、ま
奥、あ、中、より、物、入、今、と、此、方、を、改、す、と、の、う、こ、つ
き、さ、う、上、つ、か、も、さ、う、一、女、中、志、る、身、取
頼、も、と、お、あ、と、名、を、物、う、託、男、清、く、後、と
と、お、知、る、と、さ、う、姫、尺、聖、年、若、く、誕生
目、幼、く、さ、ん、の、親、え、り、親、山、の、い、親、え、り、三
る、石、ら、不、家、例、る、え、と、山、東、若、出、お、併、し
山、東、お、尾、あ、い、出、れ、の、羽、振、り、と、り、さ、う、妹
ハ、若、君、御、様、若、と、し、り、さ、う、さ、う、さ、う、也、と、氏
と、さ、う、し、と、玉、刺、さ、る、葉、と、是、お、を、い、こ、と、

ちのこを苗とし種を丹精のりし古の比
ハおのれつ胡騎あるをりつうちよのそまじ
呼いませと獨りありしは其花物に相ひ
出し大に教賦いりし一伝ていませと成
るをあるしこころ私語つし刀をせし
もるは士高の片身かひりつし机の上は
帳面をひらき終らふ十夜學をせよと
おもくは編者よと抄詞をつとみ印をある
ことなんが判る氣をせんの袴をぬけば前
ごんを結ひ田舎をせよの由らしん五あふ
あふねき縁語世話しんやしん入金をり
けと松風をこころしんも 野をきあ

くすき強ふ氣を養ひしとこり

東山家危のふり家前つしと書す

文政公の大を笑ふより松梅馬の夢免い
なつうのし左の條あり

馬の夢をよむ火梅のこゝん照君の夢を
馬よと強しと高んびえおらしそと一九
ら清を賣のやりは九のうら火のこの歌
うち丸やけつと一九の二面ありと
ときのこととありし此の條のつ

馬習字の巻

馬習字の流傳其の川竹も中友の味唯
 人より馬習字のこころ下雅を公いり父没後
 中友の家の仕人刺替え送るひ方物とし
 くていときとさる零落し流方あるが文政の
 深川橋下とよおの重なる橋たの時一口持の酒を
 て寄物も流ひ親心の入つを毛ひけらん東傳
 是れ入つを毛ひ流ひ人あまのいもあまの
 約を流ひたるも一りいんをえんが後来戦心と
 あまのち河をさしと教人きこのちけんが未あ
 ちあべきるるちりしを馬習字が入つを固く
 馬習字の流傳中友といおもひのあへうが比

ふいぬとぞいりて 親一やせせん ともよもそ 七種名
をつげしぬふるふしと 志をたふしにいけらん 空傳深
川の位にぬめるとさうに 深川中を宮八幡堂別当
の山難を大業といひ 文也のせめとけんば 大業山
とも名をもとといひ 馬琴方と云ふに 池是又
いざしるるなるるいしと 酒を 文傳のものかそうふ
時を移しとせしむるえんまをいふくくぬ 此の時
東山のあふみ 十段の今の中にあしと 大業のあ
るものこ 中ん来るはあまを つくつらぶ 二階(も)
ましといふ

此の空傳の名をやめしと 深川の人又の 旅人 馬琴
ひまのたまきくしと 机上 掃草の 暇と 書す ちん

人 空傳の 名をやめしと 深川の人又の 旅人 馬琴
ひまのたまきくしと 机上 掃草の 暇と 書す ちん

馬琴 空傳の名をやめしと 深川の人又の 旅人 馬琴
ひまのたまきくしと 机上 掃草の 暇と 書す ちん



して見えし頃の金も人も信田の終文物ありて
 ありて古ありて亡後らの家も言伝せり
 依るに二代の家名をお編す
 市信亡後今う程も馬琴山東庵に未り
 ありて京山七若必ありての程も
 十餘年一とせ芝の津ありて市兵衛といふ也
 本を誤りて的寺とせ
 るありて舌飲の交りありて
 馬琴別姓ありて名も京山おとろきなりといふ
 文化の頃河を行もつとるのひたる根岸此前寺あり
 若きより耳ぶくろしといふものあり

此の全部十二巻あり

此の世に此者五巻を馬琴宗一のとりて者張の如の曲
 亭下文庫といふ印を記しをも人より傳しけりて根岸
 殿の身より又一方の因心定通りといふの由に今
 せんて馬琴宗一かたを存をえ上げ給ひしなり
 此の所をわりの自在念も馬琴宗一自身えを
 のひしと見え身本意の十よる馬琴宗一傳を
 終りて記しに記しに此の全部を感
 ありての傳の中へ京山・家名を記ししなり
 に此の傳を記ししなり

馬琴宗一傳の如くありて
 ありて

後物飾しはまの、女侍のりあり、日星を其保
 保也、大人子とあつて親族のしこくへ
 一と姓編をこゝろぬる故之此傳を石を
 何うはあせしや

五月九日記

○あつてしうの、其過渡「二枚を構ひ考へ其
 ころと初めをえまの、のせある人は用ひて
 其端を設てへ夫と微も、その方へをこゝろ
 くよの、方便とせしむるもの、あつて二



田

表 ^{江ノ} 品川ニろせ十文
 台場通 表



表 ^{江ノ} 品川ニろせ十文
 表 赤台坊後所
 人是用



古傳の二支人
に此像を刻へ
今もその家
の傳ひに十年
前千うボウ
此像を刻ふと
云ふ



五十二文の古きを賀茂也、此の傳り傳りのかゝる形、
の古ありと云ふ、二個の傳り、
ありと云ふ、

〇楊守敏の古物を傳り、
の印ををえ、
の流石の如し、
山生牧麻可、
心島、
以解毒也、

山生牧麻可、
心島、
以解毒也、

家傳の傳り、
今上記

東京朝日新聞

日八月五
刊休無刊日
郵電金價定 郵電月夕
邸四議加人辨編兼行夏
邸次寅田沼人 副
地番一町山龍風橋京市京皇
店支社開新日朝社會式株
所行登開新日朝京東

東宮殿下英國へ御安着

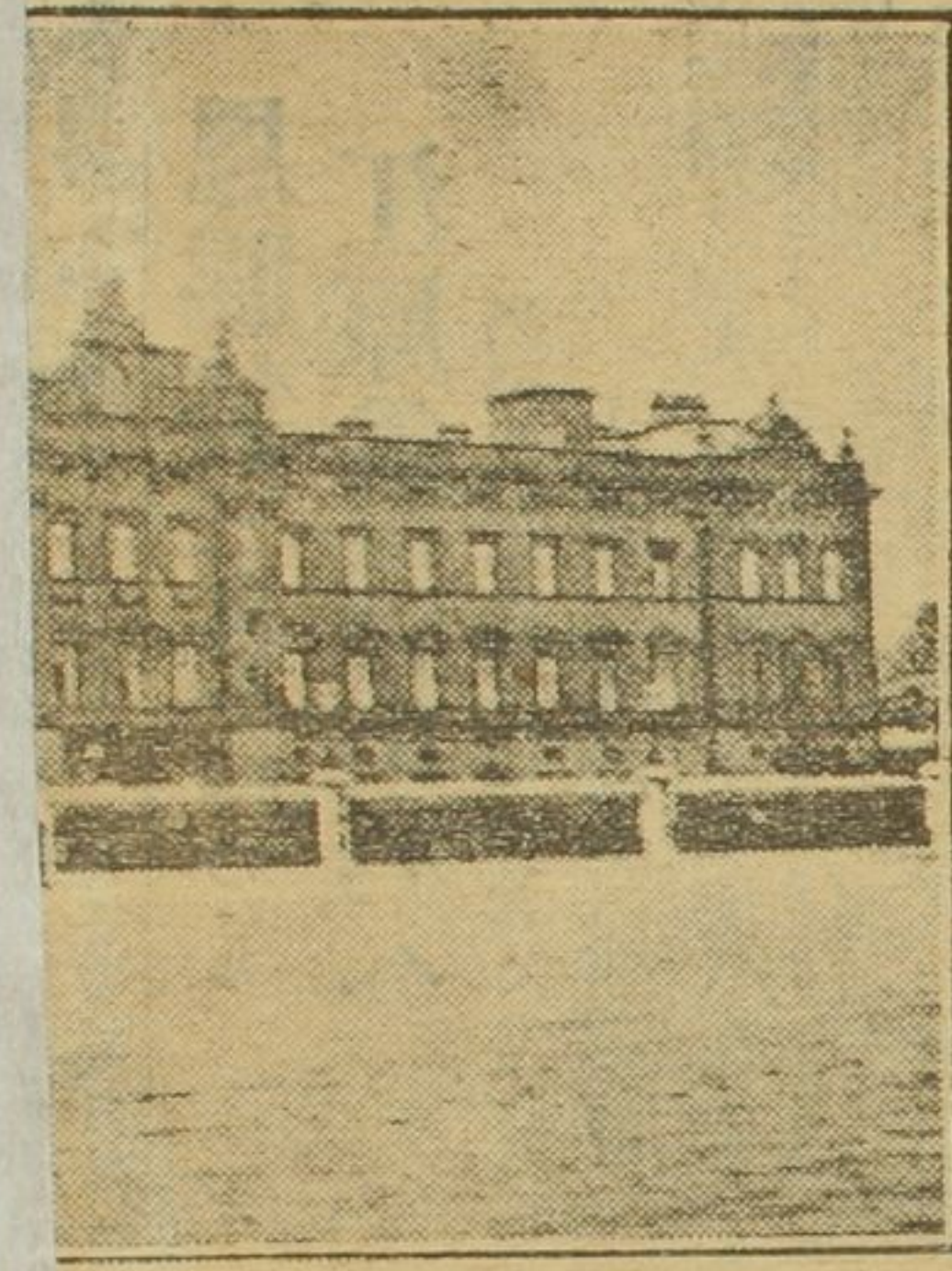
日本皇太子殿下は七日ポーツマスに御到着遊ばされたり

英國國民に御傳言

ロイテル代表者を通じて
日本皇太子殿下の御召掛けは本日當港に安着したので代表者は直に御慰問を以て殿下の御安着を祝し申し上げた。其際殿下にはロイテル代表者を通じて英國國民の熱烈歓迎の意を御慰問申し上げた。予は茲に我が同胞英國國民の熱烈歓迎の意を御慰問申し上げた。予の英皇と其の過去の功績とに對する尊敬の意は世界大戦中英皇の示した偉大なる道徳性と赫々たる勝利とに據つて更に深められたのである。この尊敬の意と従來英國と我國との深遠なる締結關係とは今回予をして大英國訪問の希望を起さしめた所以である。殿下は次いで今回の御航海中英皇領諸港で歓迎を受けさせられたについて深く感謝し居る旨御物語りあつた(國際ポーツマス七日發)

名譽陸軍大將に

英國皇帝陛下より御任命
英國皇帝陛下は日本皇太子裕仁親王殿下を英國名譽陸軍大將に御任命ありたり
東宮御旅館たるバッキンガム宮殿



立花將軍歸朝

七日浦調特派員發
七日午後發御用船高丸にて立花軍司令官は突然單身歸朝せるが此の歸朝は表面司令官會議に列する爲なりと稱しつゝあるも其の餘りの突然なる或は對露方針決定に關係あるが如し

新聞紙の奉迎特別記事

七日國際直電倫敦發
英國の朝報新聞及び夕報新聞は孰れも日本皇太子殿下の御渡英に此等特別記事掲載せられたるがこれ殿下の御渡英に對する英國國民の熱烈歓迎の意を御慰問するものなりと云ふは今日この御訪問は日英兩國親交の現存及び價値を證明するものなりと云ふは殿下の御渡英に對する日本皇太子殿下の御一方が御外遊を試みられたるは日本歸朝以來の出来事にして驚くべき意味深長なるものと論せり

皇太子御挨拶全文

七日國際直電倫敦發
英國國民に對して
余は二箇月以上に及ぶ長途の航海の後今茲に風光明媚なる吾が榮高なる同盟國に上陸するを得たるは余の最も欣快とする所なり
世界の文明進歩に對する今日迄の英國國民の偉大なる實績は多年の甚深なる愛稱の標的なりき冠近の大戦に於て英國國民の勵したる崇高なる道徳性及び不屈不撓の努力を以て獲得したる偉大なる成功は日英兩國が鞏固なる同盟關係に依つて密接に結合せる事實と相合して余の英國國民に對する愛稱を益々上にも深からしめ余をして何時か英國を訪問せんとの熱望を起かしむるに至れり
余の長く抱き來れる希望の今茲に實現せられたるは余の欣幸とする所なり余は東洋より西歐に至る世界の公道を通過し來れるが其の途次、香港、新嘉坡、古倫母、皮士西、カイロ、マニラ及びシブラルター即ち事實上英國領の諸港を通過するの好機を得たるなり而して此等の諸港の何處に於ても余は獨り英國國民のみならずその統治の下にある全住民より熱烈なる歓迎を受けたるは是等の人々が余に對して披瀝せられたる友誼と厚意とに感動し余の最も濃厚なる感謝の意を表するものなり余は是等の地に於て興味深き處を視其印象は永く銘じて忘るゝ能はざる所なるか之のみならず余は更に親しく凡ての活動が陛下の御察するの機會を得たり之等は實に英國當局の有力賢明なる統治を雄辯に證するものなり予の英國滞在期間に短行れども予はこの最初の訪問の最も愉快且有益なる相出を齎して歸國することを得るを僥するものなり

と勿論の事だ、其の邊に於ける婦人
腹をこき回す事と云ふこと、
あるが、千二ポンド
ある、此の種と云ふ、西洋書
の材料と

Income (unbroken)
Biographical Clinics 3 vol

Memoranda of the ...

市 内 版

總て本社特電は東京朝日新聞社着電に明記するに非ざれば之を轉載する事を得ず

皇太子殿下

倫敦御着の光景

英國皇帝の御出迎

九日倫敦中平特派員發

昨英兩國の未來の接觸者たるべき皇太子殿下及び英國皇太子を乗せたる宮廷列車は倫敦ウイクトリア停車場のプラットホームに靜々と入り来る是十二時四十分なり(九日午後十二時四十分)是より先英國皇帝陛下には十一時二十五分プラットホームに御着ありて待ら給ふプラットホームには御教範附日本國旗の裝飾を中心として道傍には薄砂を撒き日英其習俗を一にするプラットホームに出迎へたるは皇帝陛下の外ヨーク公爵外相カゾン侯、倫敦市長及び陸軍の將星群が如く日本側の武官もも剣光輝影凛々として格列すプラットホームの任に當れるは紳の上衣に黒熊の帽子を戴ける蘇格蘭近衛兵にして殿下は陸軍少佐の禮服又皇太子殿下には海軍服にて殿下

には英皇太子の御紹介にて英皇帝に御面會あり皇帝は英語を以て殿下の遠來の勞を慰みて御握手あり殿下には日本語にて「陛下が此處迄御出迎へ下されましたる事は感謝に堪へません」と明瞭に述べ給ひ珍田侯之を通過したり次に英國皇帝陛下の紹介にて殿下はヨーク公爵以下出迎の人々に握手の禮を賜ひ日本人側も武官の人に對しては聖手の御挨拶あり直に皇帝陛下と相並び閣院宮殿下と共に蘇格蘭近衛兵の閱兵をなし十二時四十五分英國皇帝陛下の奏する「君が代」吹奏裡に御馬車に打乗り給ひ停車場を出發一時五分バックingham宮殿に入らせ給ふ

熱誠なる奉迎

九日上海經由路透社發

東宮殿下倫敦御着の當日は市内は熱誠なる奉迎の氣分漲れりウイクトリア停車場は日英兩國國旗を以て裝飾せられプラットホームには禮裝せる日本陸軍軍人鮮紅の制服を着けたる英國陸軍士官、儀仗兵として派遣せられたる蘇格蘭近衛兵の一行、列車は儀仗兵軍樂隊の君が代の奏樂裡に到着せり時正に零時四分、コンノート殿下ウイリソン元帥、ビッチー提督、カーソン卿は御出迎ひとして先着し零時二十五分英國皇帝は大元帥の軍服を召され陸軍軍服を召されたるアーサー親王を從へて御到着あり東宮御降車遊ばさるゝや御懇篤なる御挨拶あり東宮殿下は御出迎への貴紳職員に「御握手せられ給つて閣院宮、英國皇帝、皇太子、アーサー親王と共に儀仗兵を御禮遊ばされたりそれより東宮殿下は閣院宮、皇太子と共に宮廷差遣しの御馬車に召され零時五十分君が代奏樂裡に停車場を御出發あらせらる

御歡迎の面々

君が代の奏樂裡に御着車

十日上海經由路透社發

倫敦九日發——日皇太子殿下は英國皇太子殿下御同車にて倫敦に御到着ありウイクトリア停車場にて皇帝陛下、ヨーク公爵、コンノート公爵、前相ロイド、デュード氏以下各大臣、海軍大臣、參謀總長、航空部長、倫敦市長、州知事、日本大使館長、倫敦日本人協會會長及び蘇格蘭近衛儀仗兵の歡迎を受けさせられ軍樂隊は「君が代」を吹奏せり停車場附近に群がれる民衆は一齊に歡呼の聲を揚げ宛ら百雷の一時に落つるか如し

英京市民祝意

英皇晚餐會御催

九日電通倫敦發

日本皇太子殿下

は本日午後御出迎の英國皇太子殿下

殿下は御同列特別列車にてウイクトリア停車場に御到着遊ばされ英國皇帝陛下の御出迎を受けさせらる當日同停車場プラットホームには然ゆるばかりの紅のカーペットを敷き英國儀仗兵は聯隊旗を翻し爾さし其の兩側に整列し御召列車の靜々としてプラットホームに入りて其の靜止するまで軍樂隊は囀鳴たる「君が代」を奏したりやがて皇太子殿下御召車より下り立たせ給ふやジョージ皇帝

陛下と厚き御握手

を交はせられ次で御出迎への爲め集へる英國政界の名士を首め陸海の諸將星及在倫敦日本名士に對し一順の御會釋あり駐英日本大使林男は當日ボーツマスまで御出迎への上御召列車に御同乗申上げたりやがて皇太子殿下には豫て英國皇室より御受通はしの御馬車に入らせられヘルメットと胸甲のいかめしく輝ける一兵一中隊の儀仗兵を前後に並へさせられつ、軍樂隊列の御道途を肅々としてバックingham宮殿に進ませ給へるが今日の賓客を御歡迎申上げんきて集へる熱誠なる市民の爲め

特に御道筋を擴め

させ給ひ先づウエストミン

スターより次でホワイトホール及モールを御通過あらせられたる上バックingham宮殿に入らせられたり此日本國旗は市内到る所に懸へり御道筋の街々には御歡迎の爲め日英の國旗をあしらへるウエニス風の柱を建てつられたる裝飾を始め夫れく趣向を凝らし市氏はいさも熱心に殿下の御訪問を祝せり

ジョージ皇帝陛下

には今夜バックingham宮殿

に於て正式の大晚餐會を催はさせられ日本皇太子殿下には三日間同宮殿に御留置あらせらるべく其の御引續き英國皇太子殿下及倫敦市長各主催の晚餐會催さるべく駐英大使亦日本大使館に於て晚餐會を催はすべく在留日本人團に於てもレヒプションを催はす筈

ホ港の殿下

英國最初の御上陸

九日ボーツマス高橋特派員發

我皇太子殿下には長途の御航程なく御乗艦は七日正午ボーツマス海外スピットヘッドに投錨したるが英國朝野の御歡迎準備既に全く整ひ英皇太子を初め陸海軍外務其他日英各都市は言ふも更なり殿下が空前の御壯舉に於て同盟國首都に入らせ給ふ關門たるボーツマスにては各所に日英國旗を掲揚して大歡迎の準備をさく意りなかりき斯くて殿下には九日午前十時半いよく御乗艦よりボーツマス軍港に向ふ波止場なる假 便 殿にては特に日英親交を象徴する種々の裝飾を施せり殿下には英國皇太子供奉殿一同の歡迎を受けさせられつ、同波止場にて市長ティンブソン氏の賀表を受けさせられたる後倫敦に向つて御出發あらせられたるが市長ティンブソン氏は記者高橋特派員に語つて曰く

日本皇太子殿下が同盟國英國に於ける最初の御上陸地を我がボ
イツマスに御選定相成りたるは予及市民の無上の光榮とする所
なり我がボイツマスが偉大なる軍艦なるは勿論從來日本艦隊が
訪英の際に當市に寄港するを常としボイツマスは日本海軍とは
淺からぬ因縁あり予は政治を語るを欲せざるも殿下の御訪英は
茲に十八年間の盟友たる日英兩國國民の親善の上に大なる効果あ
るを疑はず特に殿下がボイツマスに御上陸あるは日英兩國海軍及
軍人をして愈々諒解と近接の機会を與ふべし云々
他の如く七八九の三日間ボイツマスは東宮殿下と英皇太子の應酬
其他にて忙殺されつゝあるが市長の勲章授け兵隊一同に懸する歡
待園遊會等引續きある筈にてボイツマスは今や一段の活氣を呈し
居れり

英皇太子と御同乗

歡呼の裡に倫敦へ出發

十日上海經由路透社發
裕仁親王殿下にはボイツマスに於ける熱誠日盛なる歡迎に深甚
なる印象を受けさせられたるが英皇國國民の御上陸としても未曾
有の盛況にて赫々たる勳章禮服の光は眼も眩せんばかりにて無敵
の彩旗は戦風を舞ひ此の日の光榮は永く人々の胸裡に止まるべし
御召列車に日英兩國皇儲が同列に立たせられ殿たる禮節に答禮
をなすつゝ軍樂隊の日英兩國國歌吹奏にて御出立あらせられし時
の光景は頗る莊麗の感ありき停車場附近及びボイツマ市の狹隘
なる市街の沿道に排列せる群衆は御召列車の通過に際し歡呼し帽
子ハンカチーフを振りて熱誠なる歡迎の意を表せり

バ宮への鹵簿

英國國民の歡迎振

九日倫敦中平特派員發

十二時半御着の時は約十分後皇太子と御同乗船として

ドレスに儼然たるダイヤモンド眞珠を飾りて行列の最びを示せり
此際あるは驚異すべき電氣裝飾により、筆先を放ち、車上には
英皇國の國貴とも稱すべき有名人の黄金の加飾られたり大倉堂に
至る長き行列に裕仁親王殿下には英國皇
后陛下と御手を組ませられて先頭に立たれ
次に英國皇太子は一身の力を取らせられ、裕仁親王殿下はメリー内親
王を又英皇太子はクリスチャン王女を伴はれ、裕仁親王殿下はメリー内親
王と我が皇儲殿下には兩陛下の間に御着席皇
后の右に閣下メリー内親王の順序にて御着席あり、爾後皇太子
は日本皇太子殿下の健康を祝して乾杯せられ、殿下の御挨拶中總員
起立せり

英帝御乾杯の辭

見事なる殿下の御答辭

九日國際直電

今晩バツキングガム宮殿にて日本皇太子殿下の爲めの大晩餐宴席
上ジョージ陛下は皇太子殿下の爲め乾杯され、英國國民の
賓客として殿下を厚く御歡迎申し上げる旨述べて曰く
日本天皇陛下が有史以來先例なき皇太子殿下の御外遊を許され且つ英
に皇太子殿下を托されし事は朕の深く感謝するに於て英國國民の又
非常なる光榮とする所なり
朕は少壯の折奮勵して忘る可からざる日本を訪向せるが今その際日
本國民及び日本の復興を代表されたる明治大帝より受けたるまき及理
を遺想し今明治天皇の御孫に當る皇太子殿下に對しその際受けたる
御歡待に報ゆる機會を得たるを欣快とするものなり尙日本天皇陛下の
御病氣に就きては昨年來非常に痛心し居たるが今回御驅快に赴かれた
りとの報に接し大いに心を安んぜり

外に出れば群衆は一齊に帽子を打振

り雷の如き歡聲一時に起る、御車の前後は儀仗隊兵
に護られ、階下以下六層の馬車自動機に分類予(中平特派
員)は自動車に乗つて後方に從ひ、沿道の兩側は幾千萬の人に埋めら
れ家々の窓も露臺は男女の顔にて充され、行く處歡聲の場からざ
るなく窓に倚る愛らしき乙女の日章旗を、翳せるあれば彼女の母
は白きハンカチーフを打振りて殿下を迎ふ、折柄朝來の雲全く晴
れ日は燦然と儀仗兵の銀色のヘル
メットに照り輝き屋上の日章旗の
紅に對し、日英親善の情全倫敦に漲るを見たり各所に日本
人の小隊あり、萬歳の聲諸所に揚がる、バツキングガム宮
殿の前には哥倫比亞の如き毛、深き帽子を戴き灰色の外装の近衛兵
整列し、囀鳴たる「君が代」の奏樂裡に殿下を迎ふ

善美を盡し光榮に輝く

バ宮の晚餐會

英皇后と御手を組まる

十日上海經由路透社發
バツキングガム宮殿の大舞踏室も今夕(九日)は晚餐會と化し其の
壯麗なる感の夫れにも比し得べし裕仁親王殿下は英皇國國民の
を始め、奉り各皇族方と共に御入場あり各國大使及英國社交界の
紳を聚めたる百三十餘名の人々一堂に集まり極東に於る英國の情
大なる同盟國の皇儲殿下を迎へ奉り、甘き名に餘る日本側賓客は
一團をなし其他は多く宗教家、政治家、陸軍軍人及び其夫人にし
て男子は綺麗美やかなる大禮服に光榮の身を裹み夫人は美々しき

と述べられ、終りに皇太子殿下及び天皇陛下に就き、始終始終に
信と敬愛とを表せられたり之に對し皇太子殿下は次の
如き御答辭を述べられたり

英國皇帝陛下の最も懇篤なる御言葉に對して余は深き感謝を表す陛下
の御言葉が又我が皇帝陛下に日本の全國國民を深く感動せしむべきは
余の信する所なり東洋に於ける大英國の前哨地たる香港に到着してよ
り以來余は到る所に於て英國國民の最も深厚なる赤誠を受けたるがこれ
まさしく英國皇帝陛下の御指令によるもの而して又茲に陛下の御厚志
に御歡待の極まる所この親厚にして善美を盡せる御招宴を受くるに
至れるは余が無上の幸福にして感謝に堪へず余が歐洲見學及び視察旅
行の第一歩をこの大英國の美しき國土に置きし事は余の最も欣幸す
る事なり余は又日英兩國同盟國間の芽出度き關係に對して喜び禁
する能はざるものあり日英同盟はよく長年月勢根柢に對し來りしが
英國皇帝陛下の述べられし如く猶將來も引き続き世界平和維持の緊要
なる因子の一たるべし

賢慮と卓見

帝位御繼承の職分

七日タイムズ社發

タイムズ紙は日本皇太子殿下歡迎の社論を掲げ、今回殿下御渡歐の
壯舉を以て日本が遂に孤立的政策を放
棄するに至れるを意味すと見做し、洋の東西を問はず今や帝王及
其の繼承者にして其の職分を賢慮と卓見とを以て遂行せんとせ
ば諸外國との接觸を避くる能はざるの時代とはなれりと論ぜり

又同紙は今回の御訪問は儀禮的のものと思惟しつゝ、日英同盟に論及して過般の戰爭中太平洋及び地中海に於ける日本海軍功績殊に濠洲保護の偉功を指摘し彼の濠洲首相ヒューズ氏も語を卑うして感謝の意を表せる事を述べたり

珍田伯の航海談

九日ポーワマス名會特派員談
珍田伯は語る「航海は日本を出てし時とマルタに着く前とは荒れたれど大體静かな航海であつた、殿下には時には一時間位は御船のの様子もあつたが、其外常に讀書あるか又は甲板にて活に御運動あり特にデッキピリヤードをたされた、各寄港地から船のあり次第御父御陛下御兄弟御宮に御手紙葉書を常に御出しになつた、殿下の船にお強いとは吾々の實に意外とする所である、云々尚他より聞く所によれば殿下には常に外國生活に御注意あり日本に居ると一重生活をしなければならぬが此方に來れば其必要がないなど、御感想を漏らし給へり」と

叙勳と御歴訪

九日國際直電倫敦發
英國皇帝陛下は日本皇太子殿下にバス勳章及びヴィクトリア勳章を授與されたり皇太子殿下には宮殿に於て英國兩陛下と御畫會の後アレキサンドラ皇太后を御訪問ありそれよりホワイトホールに至り同所の記念碑前に花環を掛け更にウエスミンスター寺院に至り無名の勇士の墓前に再び花環を手向けられたり

勳章御贈進

天皇陛下には今回の東京陛下御渡英を慶びし左の如く英國皇太子ウエールス親王殿下に最高勳章を贈らせられたり
御贈與大勳位菊花大綬章 ウエールス親王
又英國皇帝陛下よりは御英の當日左の如く御贈與ありし由
御贈與バス大勳章 裕仁親王

○今号琳瑯夏に購入の回も中、左の二三出やし終す
五月十一日記

洞毫新論

九冊

古賀洞毫の論又と『孝』輯して
もの、字を不也、此出の内荒干、字を
改刻せしも勝々せしむらうらうら
世の女よりんが、此出首を多んか價
二十四日也

竹島亭序墨帖

此帖善る(善)亭と面白といふ
くか、善末と善るの字改め
河東薛稷之出取法褚登善書而也

◇御親電御交換 英國皇帝陛下より御親電ありたるに就き我が帝室よりも直に御懇切なる御親電を贈らせられたる由
◇御安着御祝賀 皇太子裕仁親王殿下無事御習英の報達したるに付伏見宮殿下皇族殿下、大勳位、親任官、波多野前宮相徳川公、蜂須賀侯等より是き逢りに御祝詞を言上したり

炭坑問題に全力

英首相の奉迎不可能
九日國際直電倫敦發
炭坑問題の解決は首相ロイド・ジョージ氏が最後の瞬間に皇帝に書翰を奉呈し已むを得ざる事情の爲め日本皇太子殿下をヴィクトリア停車場に奉迎し得ざる旨言上せりとこの發表に一層の希望現れ来れり一方首相は炭坑問題を閣議に討議せるが後下院に於ける質問に對し政府は解決の爲め全力を傾注し居れり目下是以上を述べざるを欲せず

稗序不亂神龍本蹟往其法在政緒
二本之間謹茲中自合流逸之規因
世不多見余甚寶之爰之 獨字

後漢黃金印款

此者天の五年 南化の人田敬之(古峰)倭
奴四王印を攻濟ししものこ此印の墨極
ハ天の四年よりあり、其後後河も攻
濟を滅ぶる也攻濟甚し印極其
印出中此の冊を要す、一二模刻印を
収む、模法又くす、不可るも唯
此鈕を其物と云ふ、是れ攻者
其款を見し、うた也

三兵タリキツク 陸氏

古の命を英譯するも、此を流布する
あり、今もその用ひのむのこころをんる文
明源流の記念者として一部を傳ふるも
妨げを、流人や此を流布する本十冊を
出するも、騰字、冊指と指し、その
刊本に比するべからざる、其程の味あ
るを云ふ

口稀出復物を居るの同くある上、東照宮側板
川古く今年一編、一十年に復たて、其の
協働するあり、和國書業の内、角尾三村作

林荒村余の山内馬込出處ある善く印傳あり
是れ余の席上御のこころ余信まじ代りあると出
す地伝ありし七格あお七しりきし思ひつきも
く喰ひ余もはるきしを幼の終りも不振を
常伝とすし何とて最終の一年の出しある
物と意を用ひてのきものを選擇ししよし
岩崎久原の文庫中よりあるもの未だ中を觸
るゝ及ひず北二座よりお中の年譜を
借り出し、其内より佳本を選ぶべきを
の貸出しし方法を探し、余亦一案を
し、軟本の留真譜を心り二冊表と三冊
後記本せん、こゝを甚く別處に
十二

らありしを、所謂の不出本を別處に
出しのころ難きを、其他稀覯ありし其の
目と傳ひが本とを二枚三枚つ、フアリレ
を合巻し、如何とせん何れも同書を
此の林三村と三四のをを、すまうや
一二様用すべしとのあるを認め、三村
余、亦す方々の案山共首の印譜を
帯せしむる印譜を、幸田成友の
をを、案山の印譜を、
常伝の抄ありし一冊ありしを、
お教の印摺ありし、物屋の
を無延を、林の

長折り、遺墨をえりて、
 〇今と菊池惺老の詞、
 二本を折くまゝ、惺老の
 山の大幅を引し、
 の家と存あり、
 寧ろ此の書、
 て却つて其書を
 得る也

湖山詩字 題籤 作木春

- 秋田 高橋 山あり
- 三河 詩
- 琴谷 山あり
- 春山 山あり
- 白北 山あり
- 黄仲祥 山あり
- 横山 雲南
- 馬頭 換山大柱の歌
- 陽宅 左橋 詩
- 位天 山あり

支峯 詩 蔡系 花弁 柱山の八

明湖の史凱神帖 題籤 全上
 題詞 系 山あり 十一枚
 白田原千心

平戶先侯既明神宗諭文託

明神宗封皇臣大閤為國王以朝鮮被兵之故也冊使
既至大閤使人讀誥文怒事與已意牴牾奮然擲之於地
嘻嗟一何壯且快也誥文今藏在伊勢龜山侯而諭文
則久落民間後歸於筑前龜井魯魯為福岡藩文學
中歲癘錮屏居海濱窮甚平戶先侯之未致仕也嘗
與魯相識憫其窮惠之以金幣魯感戴無可酬因割
愛獻諭文於侯侯不欲受之然渠意極惻款則不復
強拒姑受而藏之既而侯致仕在江都別墅次者換舊
簾獲之欲返之舊主然魯既歿其子皇又幼莫可返
侯謂家祖法印公在當時不欲講和受欺以長驅入明為

上策而今吾藏此諭文祖孫一體於心不安也但在今泛然
為明人筆蹟則或無障礙倘有人欲獲之則贈之亦可也
坦為以呈覽水戶黃門公公一覽見還其意蓋與先
侯相符老侯於是意決矣乃貶之於坦曰幾危之於愛
日橫猶外府也但拜而受之然事竟出望外也蓋侯之
謂猶外府也者以坦之創此樓在三十餘年時侯來登
表干以助之故特為此親愛之言耳抑夫先侯平生重
義輕財愛士憐才如天賦性今由前後事視之足以概
其餘則其可以貴而不傳乎因略記諭文來由一贈魯
諸子孫一獻之侯家以為他日之券如此天保九年四月
下辨

龜井魯之獻於靜山公也所以詩後公貶之於坦



時詩則留在公許。今借古如左。

吾家花石主。對豐臣大閼。勒之久矣。十載。汝惜不肯
 出。時人以為無價寶也。獨念。曾于子。得罪。免。黜
 瘠。錮。數年。尚之以災。變。產。破。而。室。如。懸。磬。於
 是。出。書。獻。諸。平。門。侯。其。至。下。蓋。欲。各。賢。其。寶。也。
 人。情。至。此。不。能。無。慨。嘆。以。短。章。

隱士家無儋石儲。徒為明室紮泥書。誰圖化心復
 黃鶴鶴乃仙禽不欲而言 元入紫雲海上都

庚辰戊午臘嘉平 屏紙 萬井與軒子

の如く未開地にある也山地多き海に沿ふる
 山海の利を占め山を其地高き其状上方
 似たり、風あり亦上方の俗に似たり
 概と浪撲也田圃ハ大い開け森林七六
 樹可成り、但此地味ハ云し瘠なり
 しまん往來の不便と日記に記し
 記せり、要は一週間の旅程我を急し我を去らし
 めどもものありさる也殊に改修鐵道沿線と云ふ
 祖先の起りて丹波の市此駅を往くこと
 き多幸なる宿昔の望を夏逢するを得て快云ふ
 可なり、京波に之寄るハ奈良と天平の古物と賞
 談し京都、山陽の舊先山禁おぬ安を一説す

を得たるを、皆永く永くも記念する事とす
 す。此等の記すも略々日記に載せんと、其の漏れな
 る所を得て更々補ふ所あるを期す。帰京後
 三日録す

北旅行中一や、山陽地方の特徵とも見ゆる
 七の層木其他を多しんか

- 一、トシ子ルの古き多きこと
- 一、枯葉の一種の屋瓦のあること
- 一、松を掃く一其の端をカナメ松の扱ふ
ハサミアルエト
- 一、地名の頗る復み難きこと
- 一、不昧の意化う茶飯味のあること

郡香住村大

つげを採りて左の如し記す日阿三

問亭	十	二十
問規守禮	八	
問吳春	十	十七
玄關		

應舉初名仙巖字是中選價齋と號し一に優作又仲均鴨水漁夫と號し主水と稱す性は藤原後源に改む氏は圓山といふ京師に住す初書を狩野派右田幽汀に作る友汀に學ぶ後一家をなす蓋沈南蘋に本く其畫く所人物花草鳥獸虫魚皆其寫生にして眞に逼らざるなく應舉平生街を過く駐めて之を熟視す其意幽靈の圖水呑の虎伏猪狗子家鶏を繪事に用る是の如し

り應舉門中の巨擘と稱せらる蘆雪嘗て皆川淇園と謀り京師祇園境内の一寺に會し蘆雪畫を寫し淇園贊を成す人争て之を買ふ數日にして金一囊を得即ち共に娼樓に上り長夜の宴を張り劇飲曉に達し囊竭て而して去れり寛政十一年六月八日四十五歳を以て没す畫家者皆流歎惜せざるなし

皇地もろく不物令まう、畫の流波の金比羅社務
 不の大心と比まふ、遊色あまをさふ、切つて共す古き
 雪深瑤華の草子、あまをさふ、あまをさふ、あまをさふ、
 あまをさふ、あまをさふ、あまをさふ、あまをさふ、
 閑花日暮、あまをさふ、あまをさふ、あまをさふ、
 くら

龜居山大乘寺略記

龜居山大乘寺は但馬國美合郡(現今城崎郡)香住村大字森村にあり開基は行基大士艸焮は 聖武天皇の御宇天平十七年乙酉にして 神武天皇紀元に後るゝこと千四百零五年 今下明治二十五年に先つこと千四百四十七年なり爾來連綿繼續せしに〇〇の初年に至り回祿に罹り漸く衰頽を兆せり

安永中住職密藏法印持律堅固にして徳望あり道俗の歸依從て篤く金穀狼戾田畑山林を買得ること最も多く寄附を受しこと亦多く當時所有の田畑美合七美二郡に跨れり法印伽藍再興の志あり檀家に至ること竹枝を乞ひて携へ歸り藏して壁骨の資となし米囊を得ること之を藏し紙を以て屏障を張るの資となし麻を以て壁骨を綴るの資となせり然るに其意を果す能はずして天明六年二月十三日を以て示寂せり

法印の示寂せるや弟子密英上人之を繼ぎ師意を承て伽藍を建立す即ち現今の建物なり初め上人の京師にあるや屢圓山に遊び一貧畫工あり應擧といふ能く鯉鷄山水を畫く上人之を愛し屢之を招く一日從容畫工に問て曰く郷亦希望ありや畫工曰く余豈希望なからんや恨くや囊一物なく素志を達するを得ざるのみ若し銀三貫目を懷て江戸に下るを得ば必ず名を天下に成さん上人笑て曰く是れ易々のみ足下途に上れ貧道爲めに之を辨せん畫工踊躍して作つ居ること三年海内圓山應擧を知らざるものなきに至る應擧京に歸り深く上人を徳とし門人數名及び吳春等を伴ひ來り爲めに高時の襖屏風軸物等を畫きて上人の舊誼を報す上人享和二年壬戌二月廿一日を以て寂す追尊して當時の中興開山とす

當時當寺は田圃極て多く今を距る二十年前までは徳米二百八十石を收め來りしに二十年前より寺政大に錯亂せり時に長谷部實應師本郡無南垣村長谷寺にあり本山師をして之を整理せしむ師拮据力を竭す檀頭福本壽一郎山田五郎兵衛橋本彌惣治數田重五郎の諸氏以下亦奔走して之を輔く漸く復舊の緒に就くを得本山之を嘉し明治十三年を以て師をして當寺に移錫せしむ爾來十有三年書畫田圃を買復し日に隆運に向く近來に至り貴人雅客來り訪ふもの漸く多く當寺を稱して圓山派古畫展覽場と稱するに至る此に於て來人益多く必ず其由來を問ふ吾曹其煩に堪へず其概略を記す

明治二十五年十有一月

但馬國美合郡龜居山大乘寺司客沙彌敬白

大乘寺各室畫家人名錄

山水の間 又大床の間と稱す

源應擧筆

應擧初名仙巖字は中選儻齋と號し一に儻又仲均鴨水漁夫と號し主水と稱す性は藤原後源に改む氏は圓山といふ京師に住す初書を狩野派右田幽汀に作る友汀に學ぶ後一家をなす白井華陽曰く應擧所人物花草鳥獸虫魚皆其寫生にして眞に逼らざるなく應擧平生街を過く駐めて之を熟視す其意幽靈の圖水呑の虎伏猪狗子家鶏を繪事に用る是の如し

等の圖殊に有名なり而して其最も著はれたるものは三井寺圓滿院藏する處の七難七福の巻物とす海内畫家之を學ぶもの漸く多く稱して圓山派と稱し或は後世四條風又上方畫と曰ふ著す所後素餘言嵐山四時詠青山紅葉等あり寛政七年七月十七日没す年六十三畫家稱して狩野探幽以後第一等の畫人なりと云ふ近來歐米人士殊に之を賞揚す

芭蕉の間 又郭子儀の間と稱す

同上

孔雀の間

同上

農業の間

吳春筆

春字は伯望月溪と號す其居もと攝州吳服の里にあり由て吳を以て姓とし京師に住す初大西醉月を師とし中ころ與謝蕪村を師とす蕪村没して後束脩を應擧に行ひ業を受ん事を請ふ應擧辭して友を以て之を待つ春討究徹を究め畫格を一變す故に其畫初は蕪村に似後は應擧に似たり晩年に至り筆法蒼老墨汁淋漓遂に一家風をなす其山水最奇なり而して艸木花實も亦妙なり春嘗て醉後柴田義董が爲めに水墨酒瓶圖を畫き且つ自ら酒徳の長歌を題す其妻怒て曰く人常に畫を乞ひ絹紙室に填つ而して醉ふて顧みず家道の窘迫を致す今日何ぞ無益の筆を費すやと春答へずして臥せり文化中没す歳六十

兀山の間 使者の間

同上

規禮字は子恭喜十郎と稱す亦應擧の門人なり

源貞章筆

藤の間

源應瑞筆

應瑞字は儀風應擧の子能く家法を守る殊に砂子を蒔に妙を得たりといふ文政十二年三月十九日没す

山本守禮筆

狗子の間 仙人の間

雪亭筆

竹の間

源應擧筆

鳴の間

源琦筆

琦字は子韞幸之助と稱す氏は駒井應擧の門に入り與旨を得美人花奔鳴禽走獸を能くす殊に設色に工にして艶麗觀るべし其優なるものに至ては應擧の畫と識別し難きものあり世妙手と稱す寛政九年八月八日不幸短命にして没す年四十八

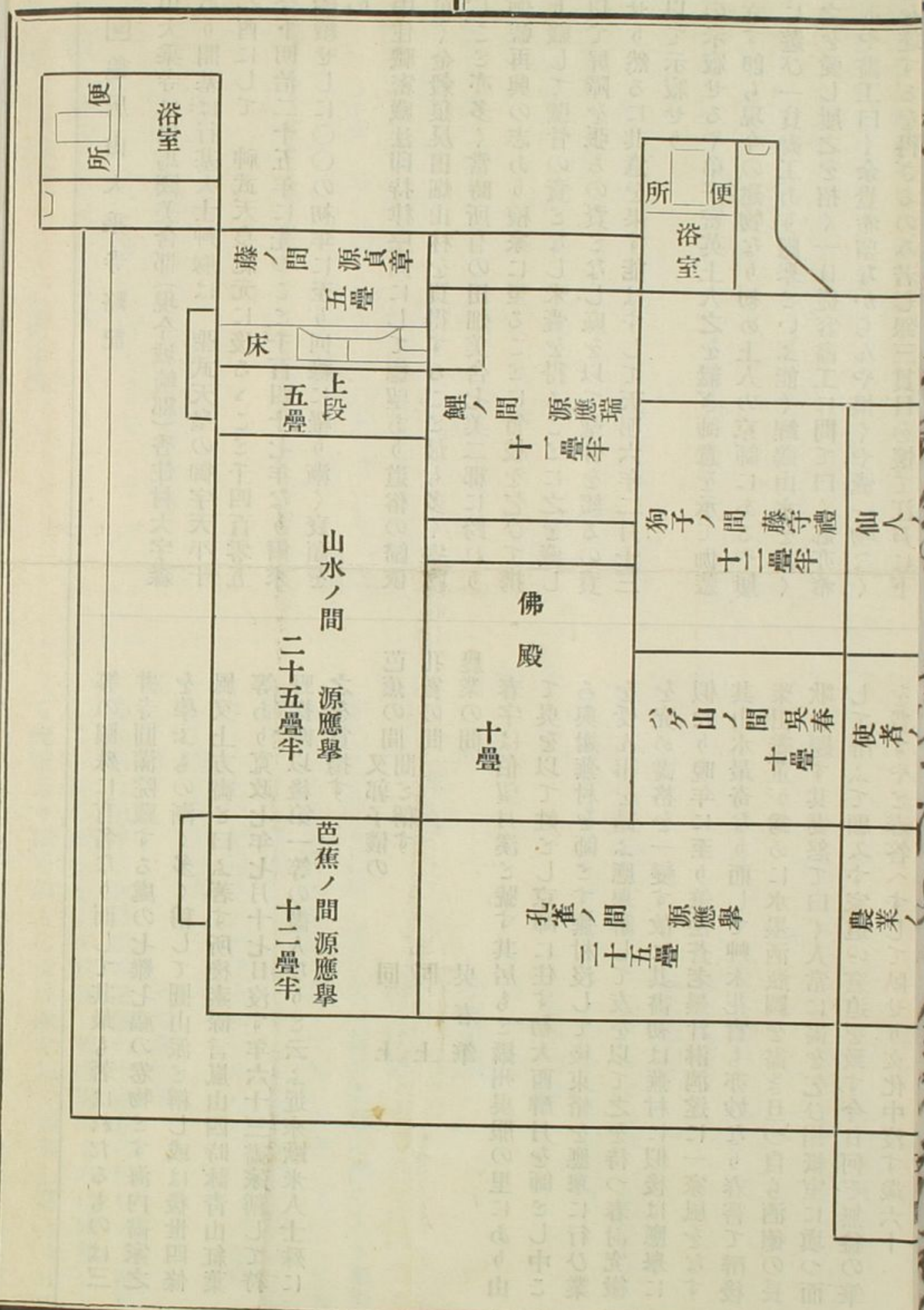
長澤蘆雪筆

猿の間

長澤蘆雪筆

蘆雪名は魚字は水計山城淀藩の士應擧の門に入り勵精して一格の新意を出す其畫く所洒落のものは疎粗にして風致あり緻密のものは肉眼を以て識別し難きものあり應擧門中の巨擘と稱せらる蘆雪嘗て皆川淇園と謀り京師祇園境内の一寺に會し蘆雪畫を寫し淇園贊を成す人争て之を買ふ數日にして金一囊を得即ち共に娼樓に上り長夜の宴を張り劇飲曉に達し囊竭て而して去れり寛政十一年六月八日四十五歳を以て没す畫家者皆流歎惜せざるなし

乘寺座敷圖



坐敷の事... 不... 念... 書... 池... 坂... の... 金... 元... 羅... 社... 務...

○今次山陰道旅行の由縁大政之主宰の御し法隆寺
 主僧の夢の如くありたあるは御如くは御休中と
 心も動かし直るは性観の次の法列り帯に出陳
 さんさる御物もまゝ加りあり、晴古の大陣列と云
 あつてまゝ杜親目を懸うけ、律の一時を走り
 走り見果つ御事のことと見え飽き足らぬ心也と云
 へ、これのありありの二の法をせむせむ思ひしと
 伴の人と云ふ事、さるは御事と云へしと云へし
 返り書減りし、ちあるいと確気なる事、今次總
 ぬの棧と云ふ事、さるは御事と云へし、目録と云ふ
 たるぬめりなど、宗目の女の事を、物と平塔と有る
 つけをを採録せん、左の如し、日記を日録と云

九八已...と二日一日...

信成画屏風 土俵 皇到度御夫人及侍女像

聖德太子像 四基

法華新院 四基 元興寺像 建永二年

太子草

元興寺加針五重塔 辛櫃 天永五年

上代風炉 推古帝卦額

青畫鏡 一隻 沈女考

海檀木 二 定暦廿年 金山寺香爐

北鼓 ツツミ 銀釵

節塔 石葉塔 御田所法華經御書

木升

新田義貞文書

十七字法版木

法隆寺献物帳 一枚

梵天三像

不風貝唐櫃 一合

御物之方具の内

釣升

聖德太子御誨語

唐尾 太子草

童子坐像 法隆寺

帝釋天三像 外二体

太子御書分奏文 天永九年新院

私物

太子御像 石滑河作

伎樂面 新院お七

皇曼荼羅

法蓮寺 住持記名 新院 皇仁寺

梵經 太子草

梓真 太子用

古面 法隆寺 廿七

太子水鏡御鏡

佛德聰寺造像記

十六羅摩像

泰公寺印 智田院

法隆寺緣紀白拍子

貞治三年 一卷

廣東小幡

廣隆寺造像狀校勘

上宮聖德法王

明詠集 講のき 山登丑年

法隆寺經願

文永 治法

古銅印二

鵲寺象印

法隆寺印

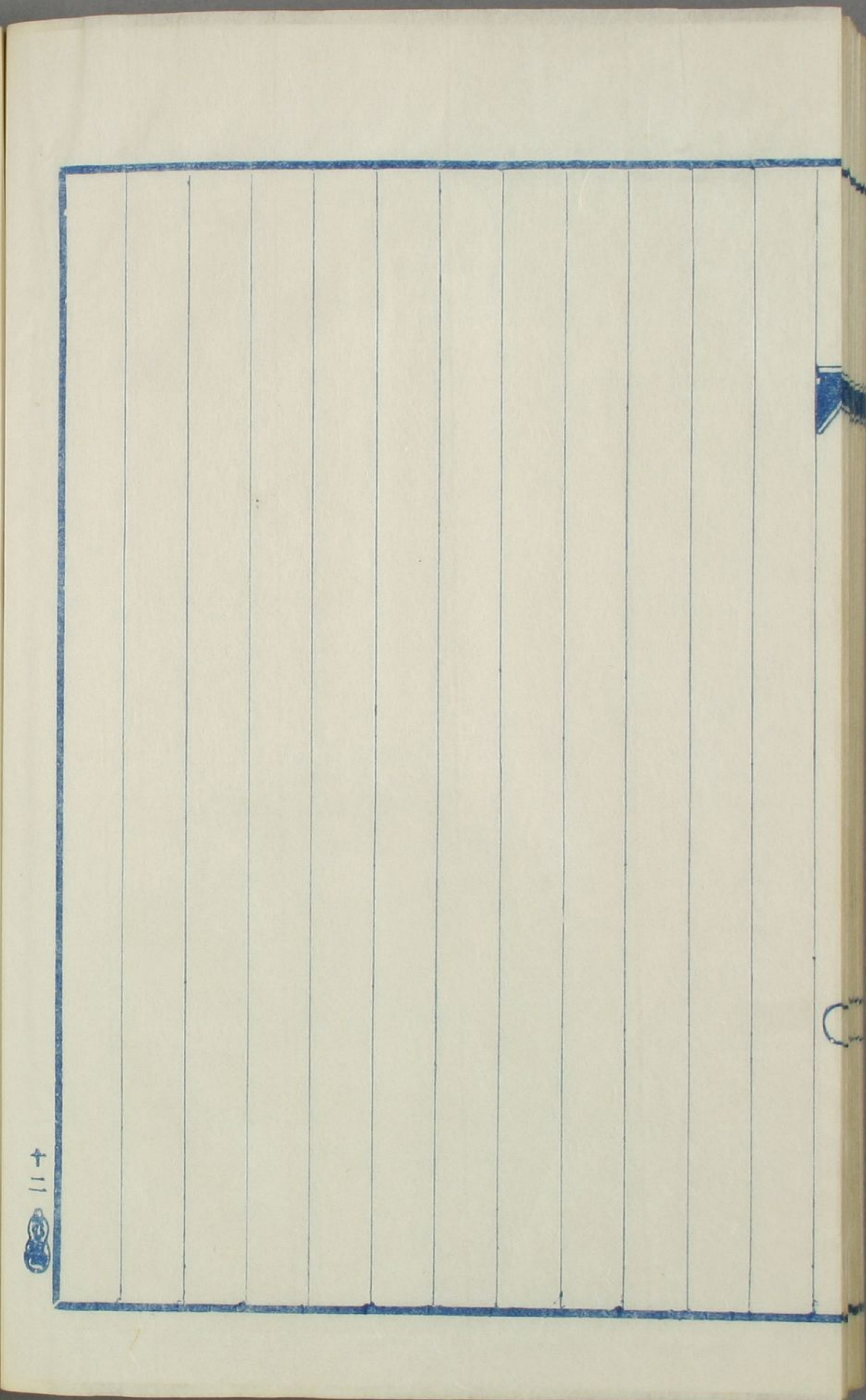
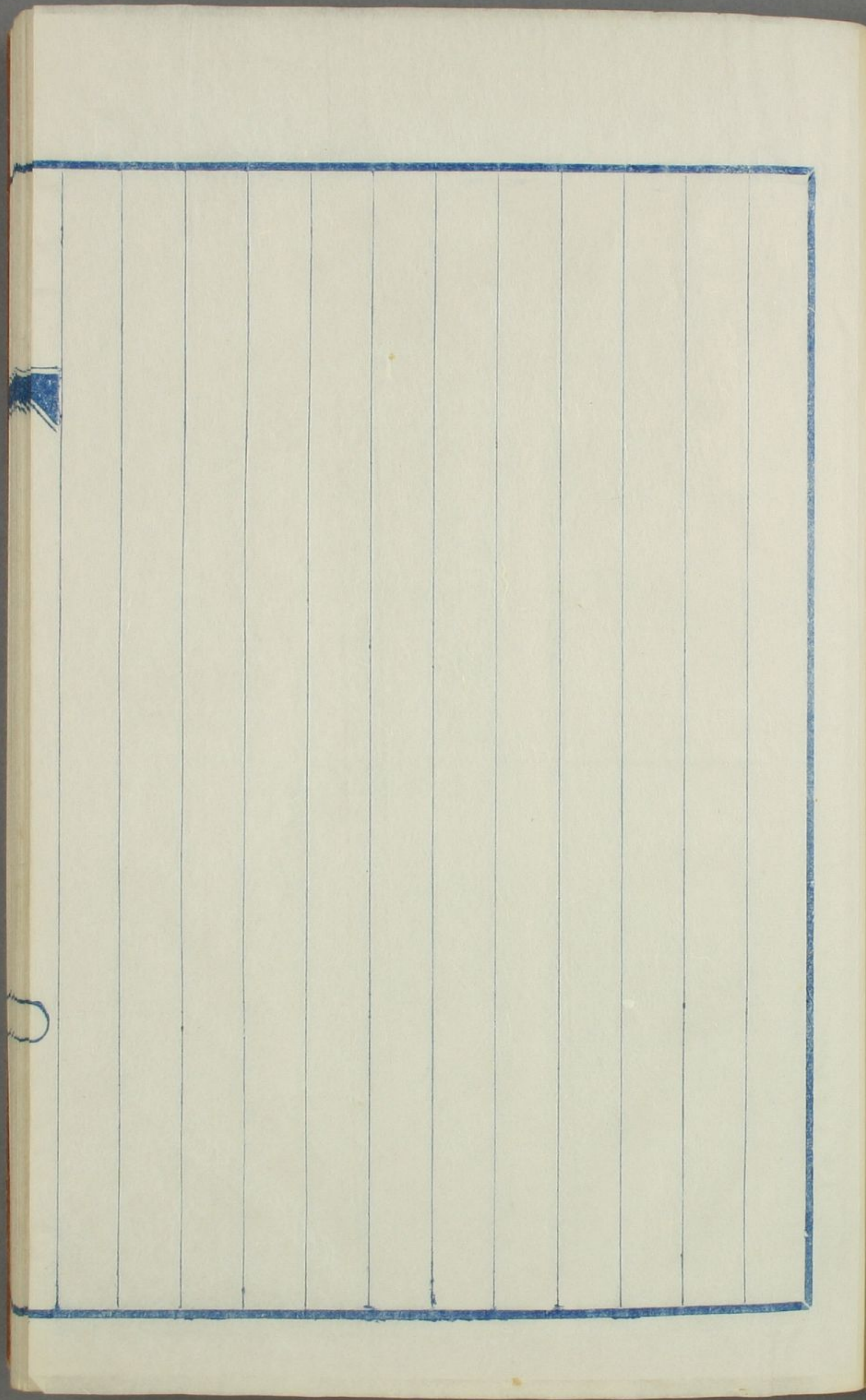
元仁帝御寺印章印

推古帝印章印

柳行控領錦

蜀紅錦

以上手帳之錦しきもの全に二枚あり、千鶴のまの
ゆきし七出陣や、逸いとまのまあるも、唯田の
改帳を感しきものこまあるも、供し千
帳の錦白きく、おきんとしと、錦さうしよ、十数
紙あり、洋印の印創目録と銘と、お説味すべ
し



◎法隆寺々寶之部

乙一三 金銅釋迦、文珠像 二軀
乙一四 金銅觀音像 二軀
乙一五 金銅觀音像 一軀
乙一六 金銅押出阿彌陀三尊像 一枚
乙一七 金銅押出佛像 一面
乙一八 銅造半肉彫阿彌陀三尊像 一具
乙一九 銅造苦行釋迦像 一軀
乙二〇 乾漆金色阿彌陀三尊像 三軀
乙二一 木心乾漆觀音像 一軀
乙二二 傳百濟國人作 乾漆金色彌勒像 一軀
乙二三 木彫金色阿彌陀像 一軀
乙二四 木彫金色觀音像 一軀
乙二五 木彫金色勢至像 一軀
乙二六 木彫金色文殊像 一軀
乙二七 木彫金色普賢像 一軀
乙二八 木彫金色日光像 一軀
乙二九 木彫九面觀音像 一軀
乙三〇 木彫彩色如意輪觀音像 一軀
乙三一 蓮臺裏ニ正嘉二年西大寺獻尊修補ノ墨書アリ
乙三二 木彫彩色帝釋天像 二軀
乙三三 帝釋天胎内ニ保元元年修造ノ墨書アリ
乙三四 木彫彩色善女龍王像 一軀
乙三五 木彫彩色鬼像 二軀

乙八七 竹 二枚
乙八八 各墨書アリ(甲一三一)御物ニ同シ
乙八九 繭 袷 一領
乙九〇 繭 殘 袷 一箱
乙九一 傳、聖德太子勝鬘經講讀御所用
乙九二 獅狩模樣錦 額裝 一幀
乙九三 騎射四王ノ模樣アルヲ以テ四天王紋錦旗ト云フ
乙九四 蜀 江 錦 二幀
乙九五 鈴 并 金 具 一箱
乙九六 几帳金具ト稱シ推古天皇御物トモ又間人皇后御所用トモ云フ
乙九七 金具及木畫等斷片 九十五箇
乙九八 傳天平年代所用
乙九九 傳天平年代所製
乙一〇〇 辛 櫃 一合蓋缺
乙一〇一 傳天平年代所製
乙一〇二 其云寺納天正二稔 甲戌九月日法隆寺聖皇院藏
乙一〇三 其二云上宮王院觀音講升康正二丙子二月日堂司重秀
乙一〇四 百面
乙一〇五 內十面元德三年ヨリ慶長十一年ニ至ル施入墨書アリ
乙一〇六 昇 面 一面

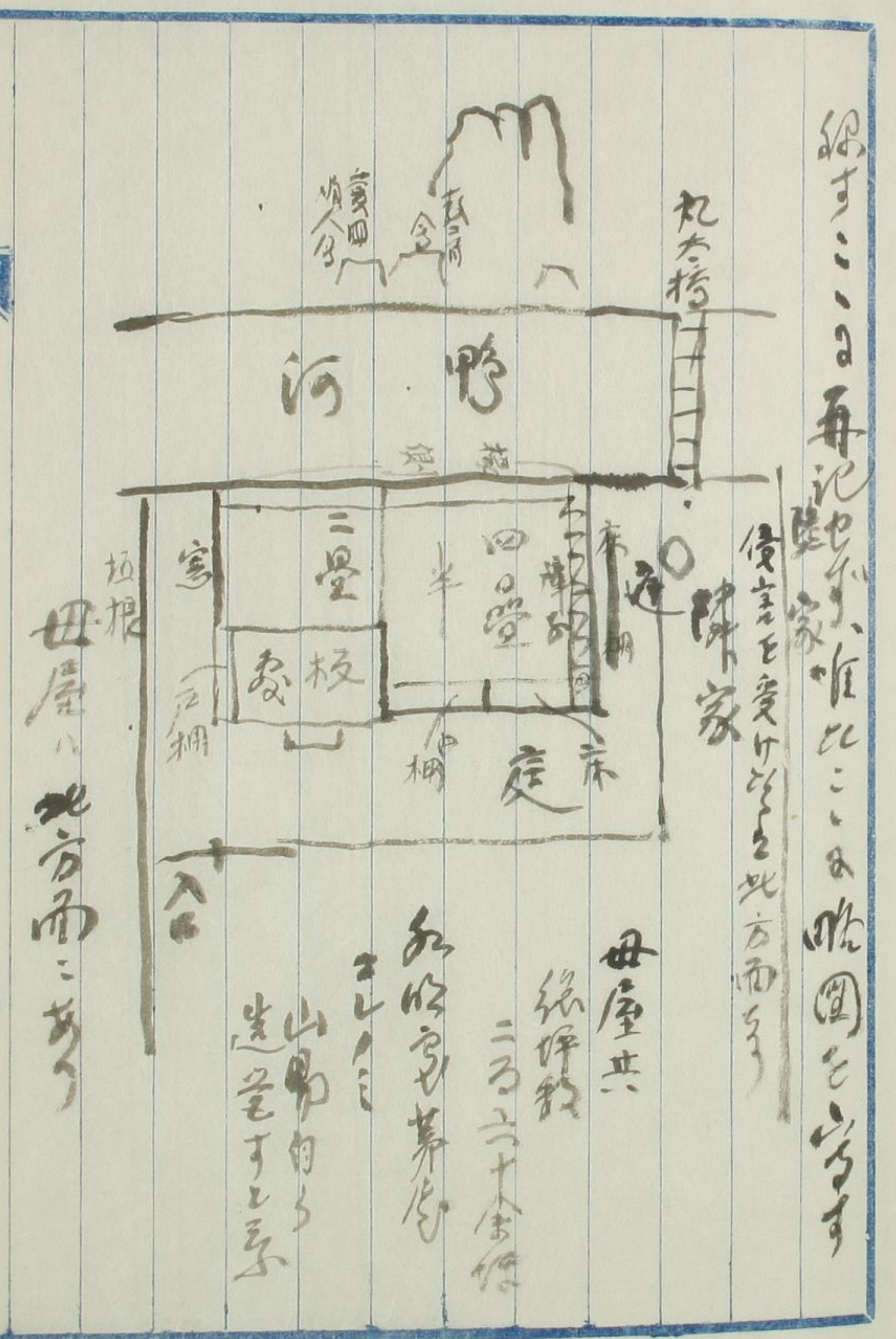
乙二一 塑造彩色帝釋天像 二軀
乙二二 塑造彩色四天王像 四軀
乙二三 塑造彩色文殊、乾闥婆王、童子像 三軀
乙二四 木彫多聞天、持國天像 二軀
乙二五 木彫彩色天人像及鳳凰 三箇
乙二六 金堂天盖ノ飾具ニシテ鳥佛師作ト云フモノ
乙二七 木彫彩色天人像及鳳凰 二箇
乙二八 金堂天盖飾具ニシテ天福年中補作ト云フモノ
乙二九 銅板光背面押出天盖附著 一枚
乙三〇 銅造像記 一枚
乙三一 表面云「甲午年三月十八日鶴大寺德聰法師片岡王寺令弁法師飛鳥寺弁聰法師三僧所生父母報恩敬奉觀世音菩薩云々」背面云「族大原博士百濟在王此土王姓」蓋シ甲午ハ持統天皇ノ五年ナルヘシ
乙三二 絹本着色聖德太子水鏡御像 一幀
乙三三 絹本着色聖德太子孝養御像 一幀
乙三四 絹本着色聖德太子勝鬘經講讀圖 一幀
乙三五 絹本着色聖德太子勝鬘經講讀圖 一幀
乙三六 絹本着色聖德太子勝鬘經講讀圖 一幀
乙三七 絹本着色聖德太子勝鬘經講讀圖 一幀
乙三八 絹本着色聖德太子勝鬘經講讀圖 一幀
乙三九 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙四〇 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙四一 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙四二 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙四三 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙四四 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙四五 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙四六 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙四七 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙四八 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙四九 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙五〇 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙五一 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙五二 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙五三 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙五四 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙五五 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙五六 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙五七 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙五八 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙五九 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙六〇 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙六一 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙六二 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙六三 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙六四 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙六五 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙六六 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙六七 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙六八 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙六九 絹本着色釋迦說法像 一幀
乙七〇 絹本着色釋迦說法像 一幀

乙一〇四 面 二十七面
乙一〇五 善 樂 面 三面
乙一〇六 舞 樂 面 二面
乙一〇七 其一石川、其二退走德 三箇
乙一〇八 瓦 寶 鐸 七箇ノ内
乙一〇九 寶鐸、瓦并ニ本寺所用 一卷
乙一〇一〇 大方廣佛華嚴經 一卷
乙一〇一一 妙法蓮華經授記本第六 一卷
乙一〇一二 大般若波羅密多經 一卷
乙一〇一三 右大般若及妙法華經ハ行信弟子孝仁等ノ敬寫スル所ニシテニ並神護景雲元年九月ノ與書アリ
乙一〇一四 意輪講式 一卷
乙一〇一五 卷末云元久二年乙丑十月十八日海上書寫了、又云建永二年丁卯五月七日已尅許改之印之
乙一〇一六 卷末云、天承二年四月廿一日書了僧智印之
乙一〇一七 十七條憲法版木 一枚
乙一〇一八 十七條憲法ハ聖德太子ノ親作シ給フ所ナリ、本版木ノ片端ニ弘安八年三月開模施入ノ刻文アリ
乙一〇一九 片端ニ寶治元年丁未十月日トアリ
乙一〇二〇 片端ニ寶治元年丁未十月日トアリ
乙一〇二一 片端ニ文永三年丙寅四月日彫之菩提寺比丘證圓トアリ
乙一〇二二 丘證圓トアリ
乙一〇二三 維摩經版木 二枚
乙一〇二四 其一片端云文永三年丁卯三月七日東大寺眞言院住持沙門聖守
乙一〇二五 其二云文永四年丁卯四月九日於東大寺敬寫之筆師〇惠

と稱し、
 語る

余の...
 河を試む、印文中...
 印身...
 松...
 家...
 あり

龍三...
 養父...
 姓...
 午後...
 山...



録す...
 再記...
 唯此...
 略圖を...
 侵言を受け...
 此方而...

母屋共
 此方而...

二三月前被命能果三属し印成る
 特ニ酒法を造み酒師吾の「成家」
 の由、刻ん印面在ることを選ぶしとて
 りんが、成家吾家の「法」を標んぬり、
 せん名に机上の玩とすを深し

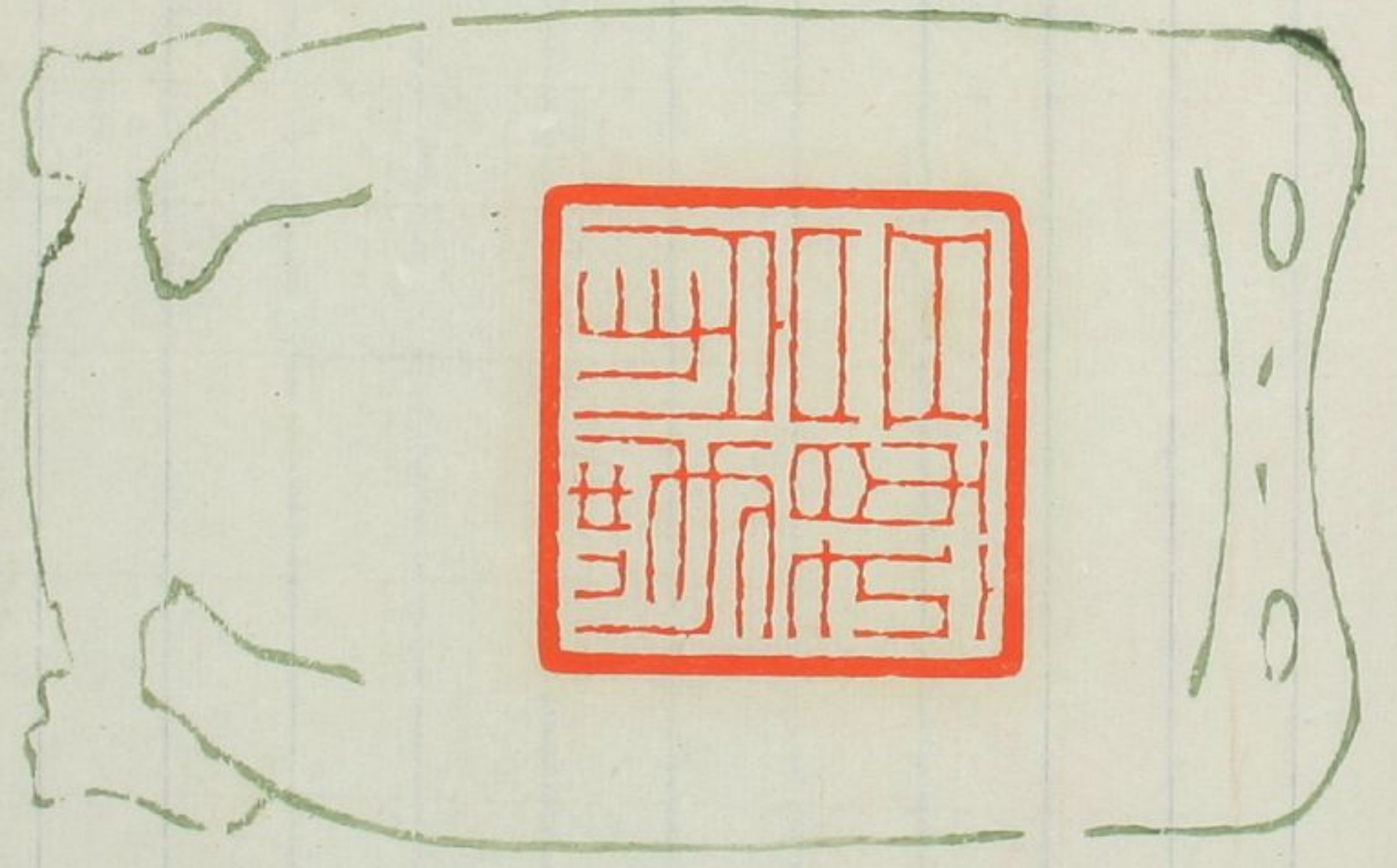
辛酉五月廿二日

印蛻

旧院与福庵・三

大正二年夏五と念五日

大正二年
 夏五
 於春
 世業一人也



自今又譲し其價以上を出す莫かれと限るに制したるに
日下頼の方より其地を完張り其後得たるを
手に入る様を乞ふ其七回とんあとの弱點あること
とんひとく其りたんとお打ちさうさうと強硬に毛問
の苦心を一方よりしと終りも其地を其地を
まを轉施し其向ある程の價格を定めて、あふると黄
とんまけは其地を全をせいと云ふことと終り頼の
不承にゆしなると云ふ、但し其許の價格を得たやと
さき満ちしはう二るにす其評と云ふはお母とて價
を拂ひたると云ふ、お又頼の許しは其家と訴訟河は
と云ふも六年と考へしは其ヤットは訴訟と云ふと云
ふ仔細をたんとお母の意は其地を其家と訴訟の

らうまの地を三合尺はうの頼の地を侵略し其
村の地を其地を其地を其地を其地を其地を其地を
とんまをたんとお母の意は其地を其地を其地を其地を
訟中にお母と其土地と他人に譲りたるは其地を其地を
新お母とお母と云ふことと云ふ、お母の意は其地を其地を
の地を其地を其地を其地を其地を其地を其地を其地を

同く其地の山易の地を其地の地を其地の地を其地の地を
たんとお母の地を其地を其地を其地を其地を其地を其地を
係ありし其地の地を其地を其地を其地を其地を其地を其地を
たんとお母の地を其地を其地を其地を其地を其地を其地を
ことある譲與問題に先を其地を其地を其地を其地を其地を其地を
たんとお母の地を其地を其地を其地を其地を其地を其地を其地を

ことあり、その誰れに傳しあるや母屋を何人の
位ぬるや、但し母屋と云ふやと疑を以て之を
断るあり、母屋と謂ふは此の意もいと之を
つゝきりしむるを母屋と云ふ借家とあり、あはれ
子こ見えやけり

○黄蘗隱元の詩集三冊を購ふ、之を珍重と云
も可き、寛文の刊行する一冊は擬寒山詩百首并
又擬寒山詩百首と叙す、こんら隱元の目録あり
巻尾に高泉の跋あり、他に隱元初集松隱集三冊
あつて一冊内一冊開く初集は完璧二集の上巻漸如集
三冊の傍二集の尾に寛文七年
著の侍者道澄編録とあり

泉州才子道成敬指贊刊此松隱二集四巻と云りと
あり、未だ翻刻を經すと云ふも収むる下の詩は皆
目録未朝以後のものと思はる、詩の如く古拙な
る所に一程の味あると云ふ、外に「山堂清話」一冊寛
文年間高泉の著する所也首尾に自序自跋あり
字本よりとも、其の用紙の輪廓樹心隱元集の跋に
酷似す、校本はあらずやと未詳、のらうと云ふも
これ又珍本なるを失ひず、

五月廿七日録

山陰松平の多師と云ふと撰くを拙中、魏侯
の條おもひしるゝ元へて手帳に書きつけしる、若し
後あり、今たゞ之を録す

此の終りありしと云ふも、以て閑也

五月廿七日 平塚

一 昔より後より幾千巻の歴史を考へてこれに王にありて
りし洗滌比と云ふを好くし縮めさせえう終るる
三流と云ふをうりて曰く生と死と滅と

一 アナトール、フランス曰く国民を育くするものゝ術
上る大教の疾呼する思ふ叫びを無くして、
根柢の富み出来に洗滌の思慕がある、
ういつかに此世界を動かす

一 フランス又曰く自然の青春といふものを飾り早く
人より出づる仕業の如くうらまへて以後の生
ハ此の世と云ふといふもの無くして送らぬもの
う其に不都なちぬもの、青春のうらまへん人生

の最も高松政として、最後に来るべき死のもの
ハ、拾ふ虫が蜘蛛や繭の時代を往くは、
めと蝴蝶の美しみの代に入ると同じ、
かゝる世の最も高松政の如く、
くも死といふ者の手あるのが中絶した

一 沙あつと、ジュリヤス、
かゝるもの、
Palm. ときをめぐ

一 街上で風の為め、帽子を吹き飛ばさん、
を拾ふと追うけよのを人に見て滑稽な
あけん、
求婚者がうらまへぬ、
何れも、
滑靴を

ひまのときふせハ千エスタトシひあり

一 罪悪のうけにせうあるときふのは山嶽と異なれい
治ひあり

一 マックス・ホルダーは精神病理学の見地より詩人の
閱歴を研究し或る心を解剖し、きん斬して
之を一切の近代文藝を精神病理学の
環におきぬと、偏見をいひ或許の真理をあり

◎ 神田古物屋の古書を購ふ

羅尼輯著

丁敷巖書

日本文集

法回 巴里京都東京所石校印

一千八百六十三年

在り扉ニ書する所あり、内容り

いろは 片仮名 古事記(一巻)

日本五代一説(一巻) 三回巻説

太平記 花巻 大子

千字文(楷) 日(子) 陶器

浮世形六枚屏風(一巻) 狂歌

増補訓書(一巻) 日本書

和歌俳句 俗文 此内又二年日本
使節の命を待

リ羅尼に違つたる出簡アリ

福原論狂歌

何れも断片也 巻首に佛字の緒言目録あり

日本文と譯を邦字と撰言す。

北内種彦の浮世形六枚屏風の席の苦を
敗らしきとあり、此を為りて壞た利を譯せ
らん且つ刑行さん等とあり、文久二年の
使節の命にさう羅尼に共くある、向を左の
也

口上し覚

北内正徳寺

松平忠元寺

東極能登寺

其都府再治の比合并治在モリ沼河合
し其再治の比合ハ昔々七月下旬にて
お申治在沼河合の上にて是を而る今

ら船の難期且又西の面と海路あんとかん
にお細夫らと其都府に再治の積り其
お申治をニニストンに入る、海路を
都府西の西と陸路貴西
江再治ホルトかんにお能回玉より地中海歴
山に船の難期夫らと海路をしと申して色帰航の
積り在ら申玉在るに其ニニストンに巨細
治し及いしらんと其お能回玉と積りニニストン
にア能回玉とニニストン

文久二年戊六月

右ノ事使節に命じられし

馬場左衛門 花押

羅尼表

羅尼と云ふ人未だ活らざるをいふ高僧の語を使ひ
のちて肉體は佛人と云ふなり、

楊鬼の狂記ハ

植て見よ花のそとぬ里のち

六、ろかろこま身ハけしけし

福海論を

此書開板以來未だ百年を以て経たんば
珍貴しとも見ざるべしと云ふなり此狂記のよ
ハ後高し行らんをいふを我もいふなり
時をとも無き所、別して今も狂記を頼
る稀観に属す
五月廿九日記

又石印大本、宋李の仲誓造法式ハ八冊を得、此書は之
即ち移し版本成ると無、言をニ據り近年石印ニ附し比
るものなり、八冊の内二冊は圖を録す、又即建梁の様
式を記しつゝ必要の由也

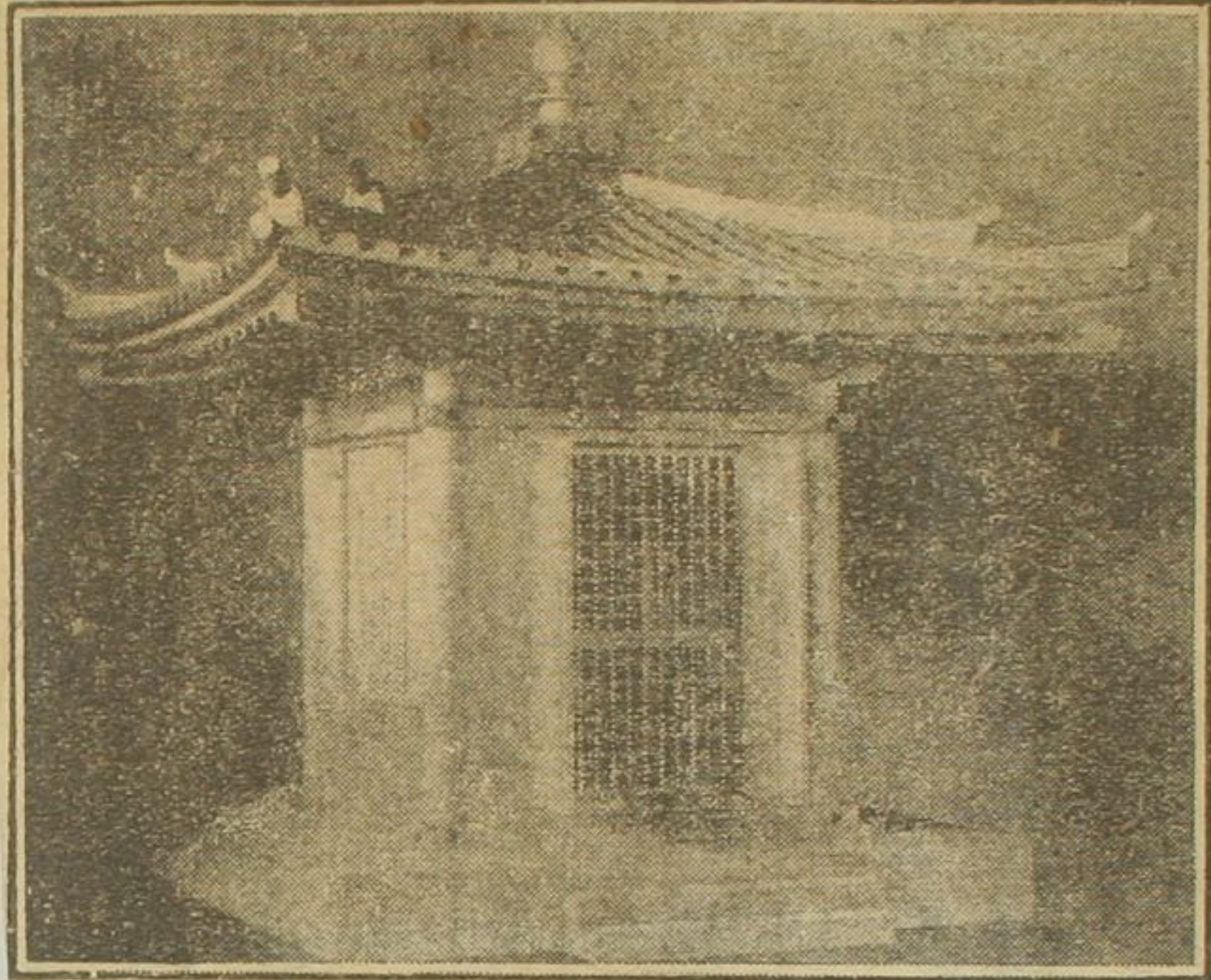
勅選ニ傳るものなり宋梁の稀観ニのむを宋
本と見せしむる物本を石印に附しつゝもの也

○早稲田のちのち校註あり曰く稲田中より得たものなり
大書の校註を記しせまりつゝなり、別に中書ありその
を記すものなり此が遺作なり、たゞぬれもの
せんなり、今も傳へしものなり、石印成りつゝなり、
つねの石印ぬれものなり

五月廿九日

良寛堂の試堂

圖は本秋出雲崎町に建立する、良寛堂の試堂にて、本朝大建造物の
 稱と稱せらる、藤原時代唯一の遺品たる宇治鳳凰堂の一角を模
 倣し安田親實畫像の設計、京都西區有坂一氏の製作に成れる一
 尺以上四方のものなるが、此程出雲崎町に到着せり尚ほ本堂は約九
 尺四方位の建築にて、本秋九月頃建立竣成さるゝものなりと



のち新座：おんへき寸本今
 月申得るもの内可なり
 もの二三ありたりねす

嘉永新座版

海老摺 三十七枚

一江戸切摺圖

え松のて摺の帯と便
 丁とえん心形に折り
 あり呉綴服の袋二
 箇：収めたる金屏
 物と線線のとめの
 つきありまじりあめ

山牕法供

を語るものうら

山中行天の意十二枚をい帖し
 けものうらに松麁向の題箋箋箋地
 りて甚漢物也、座す行天の存柱
 畫冊のい帖もな名地帖とて優
 一等、余行天の畫の和具を脱
 すと執改を考す

接胤字の

えんちのうらに得る家地種の手冊字
 山がわりのい六あんのえんちと元禄の刊
 本也

○ある前著の合別在二日を考ふる今此ハ二山の
 正平を付い未る、印刀推の帯ニ付、在、置る一研を
 去し、研背に冷雲の二字を以象刻せしむ正
 平五六の世窓環視、向、刀を挿り吐、刻しり
 些微係せ成る、嗟、初めし象刻の氣力を目のあら
 り元之其の神速るる、故るく、余正平！、刻れを回
 く人の目前に印刀を執る、其、斯く空のちりると人
 知らば、人の多く刻料を出不ま、いと一矢、五
 月書、既す。

○わ中跡踏ををゆつと、旅も十五六程を得中、
 珍く、きものあり

仙傳四行 八冊二帳

仙 浦揺壇 三冊
 長生詮 一冊

仙 無生訣 一冊
 寂光境 三冊

内容在のり、後撰し、と云る名、詳らるる、後、
 仙傳四種と云ふ、仙傳共二回あり、回甚に致あり、刊
 年、詳らるる、と云る、萬曆を下らず

書行稿漫録 四卷合一冊 官本

山本北山の池葉下り、説て漢文、一箱の序あり、狂
 歌、書文、座りの印あり、其、龍の齋、花と見え、
 此、出刊本に未比見ず

佛說摩訶訶酒佛如樂經

龜田勝為の跋に傳る酒經也卷首文晁の傳
重劉伯倫云々天美祿を祀る圖を収む又卷尾
に抱一政本ありの傳あり海多森の跋あり装
訂経体云々雪舟の傳を用ひ此云今録る稿に
あり複製局に一本を以んと今工程中に
ありの圖を傳たり

和漢名苑

梅山行系傳略

共ニ架布に一本あり今より傳たりと原初稿を
也

北溟遺珠

頼時彦の詩教供傳たり其の家に伝し其の

蛤御所の歌多の海兵衛の傳に傳る、昔傳るに伝
するものも越歴中抄をもし其の、北溟の、この
集ありぬのそと北海流と流ひて出さざる者を、
久遠の海流の蒐集あり其の也、集なり時彦の
昌平圖書を伝るんは、其人の書を傳るんこ
とを伝ふの、出向の複製を載す、珍を可也
なりと集りか中より一本無きものなり、青月日記

天象考闡抄

古久保嘉永著

望亭書局

意へう抄本

伝を盛りにて天體の

旧形あり

江州義仲寺蓮花新仙圖

文字配列法

字庫ノ文字ハ數千ノ現
代通用文ニ使用スル文
字ヲ摘取シ、之レニ公
用文及ビ地名人名ニ表
ハレタル漢字ヲ追加シ
精密ナル調査ト實用
配列法ニヨリ、各種ノ
文書ヲ遺憾ナク印書シ
得ラルル文字ヲ網羅セ
リ、而シテ文字ノ使用
度數ノ多寡ニ應ジテ左
ノ四階級ニ配列シ、之
レヲいろは別ニ分類セ
リ。

- 一級文字 最も使用度
數多キ漢字
及ビ平假名
片假名
- 二級文字 使用度數一
級文字ニ次
グモノ
- 三級文字 使用度數二
級文字ニ次
グモノ及ビ
ゴジツク片
名假

一	二	三	備	豫
總建遺橋壘繫繫響鏡潔稽携廉懸顯鷄	松理哩漫滿壘繫響鏡潔稽携廉懸顯鷄	句屈屑空雲俱唵訓靴刺裸樂絡偶隅遇群	乃奈那捺捺做軟繩	疎側測祖祖祖祖祖祖祖祖祖祖祖祖祖
元玄彦幻迎載際儂曉劇源激諺嚴擊	惠蓋憲圈狂狹研型繭胸縉軒野儉境擊	谷厄夜稍彌藥碼	俗威族贈像息素奏	東走爭會團脫暖題
...

字六廿百千三數總シ查調計統リ書文ノ面方種各ハ字文表列記此
日ハ行一ノ(欄空)欄用專中表列記本
本シ若

芭蕉中在三十六人肖像と撰考し、
嘉永四年刊行賀言と云
一詩仙中三十六人肖像 一冊 古版也
一鯉魚集 一冊
こゝに土佐実重の詩集也。明治三十五年活版
に附するものとの改定も土佐に於て
排印せしめ都下にて得たり。余実重
の為人を好む。此集余の志を成す也。

海をハ大ウとシ支那和衣の研と云ふを記さず青
紫層を有し唐の唐と云ふ石面を有する瑞澤
研を記さず蓋と云ふを記さず石を刻する石の如
し祝田刻の如きもの改刻せば或は机上に置
くも得べき歟

二月一日記

○山々出版社より出さんと云ふ余の西洋文藝
書取説、樽巻を何と命ずべきや五分巾、フト
思ひのき、蟹の泡と云ふ命ずべきやと二三の
友人に問せしに、まじりて云ふ、未だ未だ
と云候補の一事ならずし、蟹と腸と云ふ
え、二あり無腸と云ふり、又蟹を樽巻行す
まじりの秋成横行かたを云ふを云ふも謂ふ

キヨウアツク今、輯めざるも多くいつまじり
うりの文人其他の人物とし其の行をすべし
往を脱して蟹のことに横行す蟹を以て余
す最て不可なりとせし而して其と云ふ其の
逸話を唯は漢書の一矢を傳するを目的とし
こ深き意義あるものなり、思ふに漢の如き
れ、或は何れの意義を以て唐の如きもの
ず、泡を以て云ふる不可なりと云ふ、似たり、六
月一日録

○寸本満四所後敢て蒐集をつとめず、唯は時と衣款
に足らば購ふ、書畫屋の商らし来らもの寸珍書畫
帳を購入ること例の如し、本年一月以來得る所を

誠を列記するに大略左の如く、其数六十に満つ、又知し
 七座本のあり、然るに其年迄廿五集の或る
 もの、比年ハ傷むものあり、尚在るは、これを葛集とせん
 愚を、換わする座本を以てし、終に愚本を今も駆除するこ
 とを得ん、且つ千一満つとある版本、あるは約百種あり
 及ぶべくんハ、字を書画帳と今も除外して、版本の多
 千種を得んことを庶或す、而して之を難多の多あり、今後
 三四十を漸くせん、及ん
 出書

- 一 五峯郷土詩
- 一 源氏和歌カルフ 一函
- 一 城後廿二景圖
- 一 嘉永江戸切繪圖 七枚
- 一 城後海府画帖
- 一 日本碎語
- 一 巻石畫冊
- 一 操瓶字要

- 一 柳外詩画冊
- 一 古葉印鑑
- 一 碧中錦編序
- 一 性理新論
- 一 晴湖凱袖帖
- 一 源氏和歌 字後入
- 一 一開排詞帖
- 一 長吹響本
- 一 弄花帖 五葉
- 一 袖珍勤行集 三
- 一 汪菴在泥金拈花帖
- 一 古今印品 二三
- 一 山牕法供
- 一 曆釋
- 一 自字本
- 一 梵評印譜
- 一 山陽心伝
- 一 論畫百絶
- 一 今心ハ文
- 一 秀心武切記
- 一 代辞贅録 二
- 一 繪本千習鑑
- 一 柳湾遺稿
- 一 佛説三劫妙典

一 韻牌

一 古器具紋

一 解珠 印語

一 柳外廿字詩卷

一 春画

一 善悪星白言

一 猫の筋豆

此外二十二種 お伽本

六月一日記

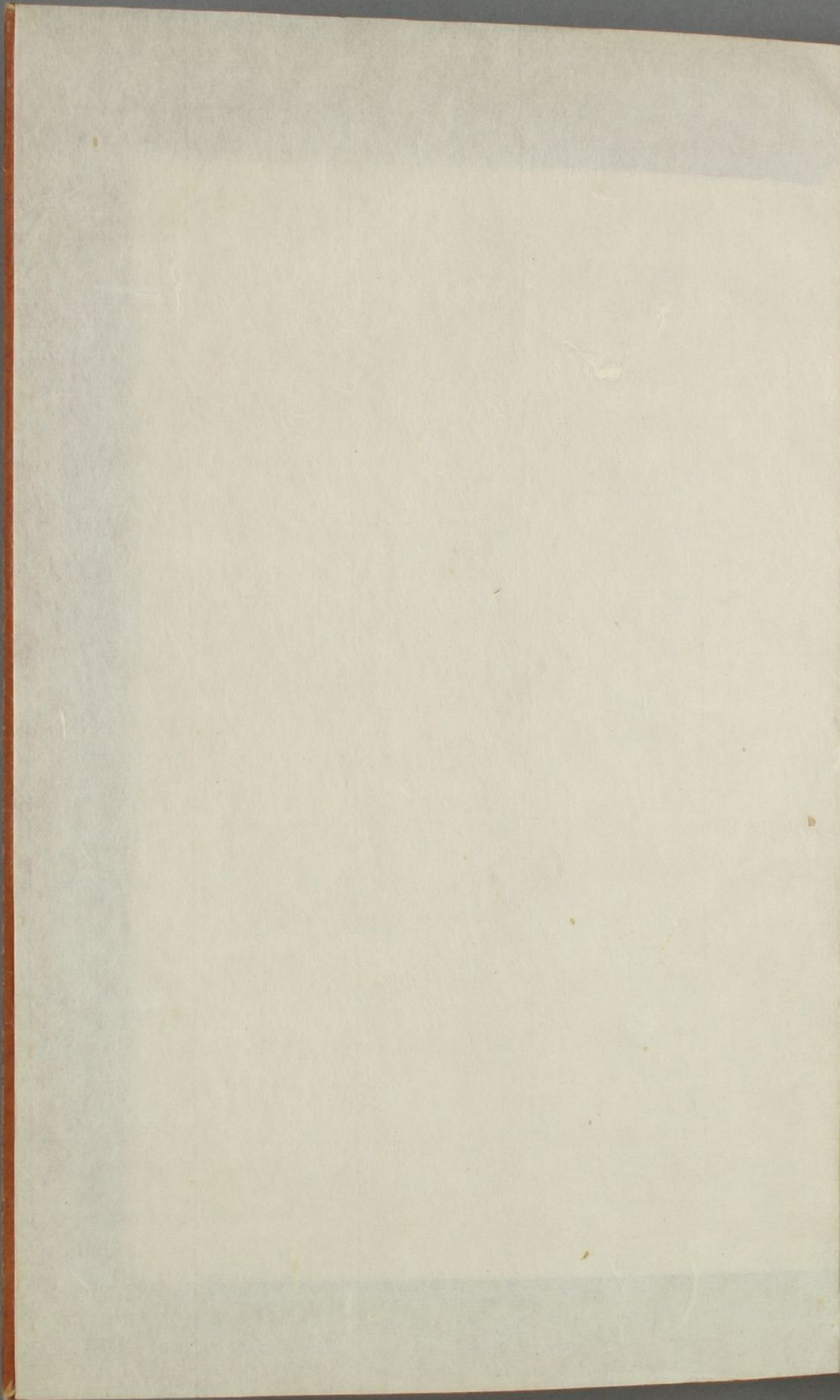
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十一

十一





十二



